

浅川扇状地遺跡群 駒沢城跡

— (株)エス・エス・ブイ店舗（西友古里店）建設地点 —

小島柳原遺跡群 中俣遺跡Ⅲ

— (株)永楽開発長野支店事務所建設地点 —

1996年3月

長野市教育委員会

序

平成5年3月、長野自動車道・上信越自動車道の開通および長野新幹線建設の進捗は長野市にとって高速交通網社会の到来を感じさせる出来事であります。また、1998年長野冬季オリンピック開催に向けての施設建設やアクセス道路の整備も着々と進み、長野市の景観も徐々に変わりつつあります。しかしながら生活の向上を求めらる中で地中に埋もれている貴重な歴史、埋蔵文化財がこれらの開発行為によって犠牲になっていることも忘れてはならないでしょう。私たちはその開発行為により失われてしまう埋蔵文化財の保護・保存・公開という大きな責務を担っています。

本書に所収しております2遺跡は、浅川扇状地と千曲川微高地上に展開する長野市北域を代表する遺跡です。今回調査した面積は開発事業の性格から狭いものでありましたが貴重な遺構・遺物を発見することができました。ここに長野市の埋蔵文化財第76集として刊行します本書には、その成果を詳しく掲載しています。連綿としてつづられてきた人々の歴史のほんの一端にすぎませんが、地域史解明の一助としてお役立ていただければこの上ない喜びであります。

最後になりましたが、埋蔵文化財保護にたいし深いご理解とご協力を賜りました(株)エス・エス・ブイ、(株)永楽開発長野支店の関係者の皆様そして発掘調査に従事していただいた皆様に厚く感謝申し上げます。

平成8年3月

長野市教育委員会
教育長 滝澤 忠男

例 言

- I 本書は、(株)エス・エス・ブイが施工する店舗（西友古里店）建設および(株)永楽開発長野支店事務所建設に伴う緊急発掘調査報告書である。
- II 発掘調査は、埋蔵文化財発掘調査委託契約書および協定書に基づき長野市教育委員会埋蔵文化財センターの直轄事業として実施した。
- III 本書は、調査により検出された遺構・遺物を中心に基本資料を提示することに重点をおいた。
- IV 遺構の測量は、平面直角座標第Ⅷ系の座標値と日本水準原点の標高を基準とし、コーデックシステムを援用するため(株)写真測図研究所へ委託した。
- V 遺構分布図等に遺構略号をもちいた。竪穴住居址（S A）・掘立柱建物址（S T）・井戸址（S D）・土坑（S K）・土墳墓（S J）・溝址（S D）・掘跡（S F）・不明遺構（S X）である。
- VI 遺構図・遺物図の縮尺は、図中のスケール・キャプションを参照にされたい。
- VII 遺物図のうち断面が白抜きのものは土器類、黒塗りのものは須恵器、アミ掛けのものは陶磁器を表す。また、器面の密点アミ部は赤色塗彩を、粗点アミ部で黒色処理を施された部位を表示した。
- VIII 遺構図のうち密点アミ掛けの部位は焼土範囲を、変形アミ掛けの部位は炭化物の散布範囲を示す。
- IX 遺構断面図の数値は、日本水準原点よりもとめた標高値である。
- X 遺物写真の番号は、実測図遺物番号に対応する。
- XI 調査によって得られた諸資料は、埋蔵文化財センターで保管している。

浅川扇状地遺跡群 駒沢城跡

— (株)エス・エス・ブイ店舗（西友古里店）建設地点 —

例 言

- 1 調査地は、長野市上駒沢字寺浦1033番地他に所在する。
- 2 発掘調査は、平成6年12月26日から7年3月14日にかけて実施し、1,400m²を調査した。
- 3 整理作業および報告書の刊行は、協定書に基づき平成7年度に行った。
- 4 遺跡の略号は、「AKCS」である。

目 次

I 調査の経過	1		
1 調査の事務経過	1		
2 調査日誌抄	1		
3 調査の体制	3		
II 調査地周辺の環境	4		
1 地理的環境	4		
2 考古学的環境	7		
3 駒沢城跡について	9		
III 調査	10		
1 試掘調査	10		
2 1次面の遺構と遺物	10		
(1) 堀跡 11	(2) 土坑 12	(3) 溝址 14	(4) 柵址 14
(5) 火葬施設遺構 15	(6) 土墳墓 15	(7) 検出面の遺物 15	
3 2次面の遺構と遺物	15		
(1) 住居址 16	(2) 掘立柱建物址 18	(3) 溝址 20	(4) 性格不明遺構 20
(5) 検出面の遺物 20			
4 3次面の遺構と遺物	20		
(1) 溝址 21	(2) 検出面の遺物 21		
5 遺物観察表	24		
IV まとめ	25		

挿 図 目 次

1 図	調査地及び周辺地形図	5
2 図	調査地及び試掘坑位置図	6
3 図	調査地周辺の字境図	6
4 図	浅川扇状地の主要遺跡分布図	7
5 図	試掘坑土層柱状図	10
6 図	1 次面の遺構分布図	11
7 図	試掘実測図	12
8 図	1 次面土坑・火葬施設・土墳墓実測図	13
9 図	2 次面の遺構分布図	16
10 図	1 号住居址実測図	17
11 図	2 号住居址実測図	18
12 図	1 号掘立柱建物址	18
13 図	2 号掘立柱建物址	19
14 図	3 次面の遺構分布図	21
15 図	3 次面 1 号(下)・2 号(上)溝址実測図	22
16 図	遺構出土土器実測図	23
17 図	検出面出土遺物実測図	24

I 調査の経過

1 調査の事務経過

(株)エス・エス・ブイ店舗（西友古里店）建設に伴う発掘調査に至る経過を関係書類から日を追って記述する。

[平成6年度]

8月22日 上駒沢地籍におけるスーパー建設に関する埋蔵文化財保護について協議を行う。開発予定地は駒沢城跡との伝承があり、県教委による新幹線建設地の試掘調査で埋蔵文化財の包蔵が確認されているため、隣接する当該開発地も遺跡の可能性が高い旨回答する。店舗開店工程が示され、2月工事着手を予定している。

10月12日 試掘調査に伴う調査依頼書および土地所有者の承諾書の提出がある。第2回保護協議。

10月17日 試掘調査を実施する。駒沢城跡の外堀と思われる落ち込みを確認する。

12月9日付 長野市長（建設部建築指導課）あてに西友古里店建設に伴う「開発行為に関する事前協議申出書」の提出がある。15日付で建築指導課長あてに埋蔵文化財が存在する旨回答する。

12月13日付 (株)エス・エス・ブイ代表取締役より文化財保護法57条の2第1項の規定に基づく「埋蔵文化財発掘の届出について」の書類の提出がある。16日付で発掘調査の保護措置が必要の旨を記し、県教委教育長宛に進達する。同日付で埋蔵文化財発掘調査依頼書を受理する。

12月15日付 発掘調査・整理調査年度および総経費等を記した「埋蔵文化財発掘調査協定書」を締結する。

12月16日付 委託者(株)エス・エス・ブイ代表取締役海老根政勝と受託者長野市長塚田 佐と「埋蔵文化財委託契約書」を締結する。

12月19日付 文化財保護法98条の2第1項の規定に基づく「埋蔵文化財発掘調査の通知」を県教委教育長宛に提出する。

12月26日～3月14日 発掘調査を実施する。

1月4日付 県教委教育長より「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について（通知）」がある。

3月20日付 県教委教育長・(株)エス・エス・ブイ代表取締役宛に「発掘調査終了届（通知）」、長野中央警察署長宛に「埋蔵文化財の拾得について（届）」「埋蔵文化財保管証」を提出する。

5月15日付 県教委教育長より「埋蔵物の文化財認定について（通知）」がある。

[平成7年度]

4月3日付 「埋蔵文化財発掘調査委託契約書」（整理）を締結する。

2月29日付 「埋蔵文化財発掘調査変更委託契約書」（減額）を締結する。

3月29日付 『浅川扇状地遺跡群駒沢城跡・小島柳原遺跡群中俣遺跡Ⅲ』を刊行する。

2 調査日誌抄

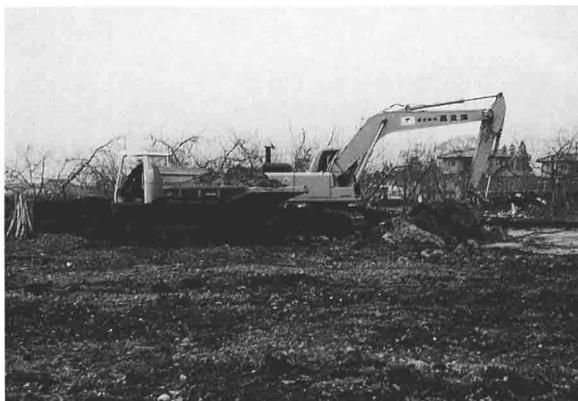
12月26日・27日、1月8日・11日・12日 重機により1次面まで表土除去作業。

1月11日 調査機器材搬入。プレハブ等設置。

1月12日・17日・19日 調査地内の排水溝掘削。遺構検出作業。

1月19日 溝址（1号～4号）・土坑（1号～5号）の掘り下げ開始。

- 1月23日 1号土壌墓の調査開始。
- 1月26日 1号・2号火葬施設の調査開始。
- 1月27日 1次面の調査完了。写真撮影。
- 1月30日・31日 遺構測量。
- 2月1日～6日 重機により2次面の露呈。
- 2月6日～9日 遺構検出作業。
- 2月14日 1号・2号住居址の検出開始。
- 2月16日 焼失住居（1号住居址）の写真撮影。1号溝址の再調査。
- 2月20日 炭化材除去後の住居址写真撮影。堀跡のトレンチ調査開始（～28日）。
- 2月24日 掘立柱建物址の調査・写真撮影。
- 2月28日・3月2日 2次面の遺構測量。
- 3月6日～8日 重機により3次面の露呈。
- 3月8日 遺構検出作業。1号・2号溝址の再調査。
- 3月14日 写真撮影。遺構測量。現場作業終了。



I-1 表土除去



I-2 排水溝掘り



I-3 1次面の調査



I-4 土壌墓の調査



I-5 2次面の露呈



I-6 3次面の調査

3 調査の体制

調査主体者 長野市教育委員会教育長 滝澤忠男
総括管理者 埋蔵文化財センター所長 荒井和男 (H6)・丸田修三
主幹兼所長補佐 鈴木貞男 (H6)
庶務係 所長補佐兼庶務係長 山中武徳 (H6、経理・契約事務)・小林重夫
事務職員 青木厚子 (経理・庶務)
調査係 所長補佐兼調査係長 矢口忠良 (報告書編集)
主査 青木和明
主事 千野 浩 (試掘調査)
主事 飯島哲也 (主任調査員・保護協議・遺構写真)
主事 風間栄一 (遺物写真)
主事 小林和子
専門主事 太田重成 (H6)・清水 武
専門員 中殿章子 (調査員)・笠井敦子 (H6)・山田美弥子・寺島孝典・西沢真弓・小野由美子 (整理調査員)・田村直也 (H6)・永井洋一・堀内健次・藤田隆之
発掘調査作業員 岩崎寛治郎・岩崎利子・奥村和子・北村幸恵・小林紀代美・小宮山静江・坂田与一・清水かおる・鈴木友江・常田保子・中島芳江・中村忠彦・長谷川繁信・待井春子・松尾よし子・宮沢つね子・宮澤美代子・宮之内和雄・村橋寿美男・大和笑子
整理作業員 池田見紀・岡沢治子・小泉ひろ美・塚田容子・徳成奈於子・西尾千枝・向山純子・武藤信子
遺構測量委託 (有)写真測図研究所代表取締役 杉本幸治
重機等賃貸借契約者 (株)守谷商会代表取締役 木島陽一郎
(株)エス・エス・ブイ担当者 長野開発部開発担当課長 宮下高広・同 黒岩 登



I-7 発掘調査従事者

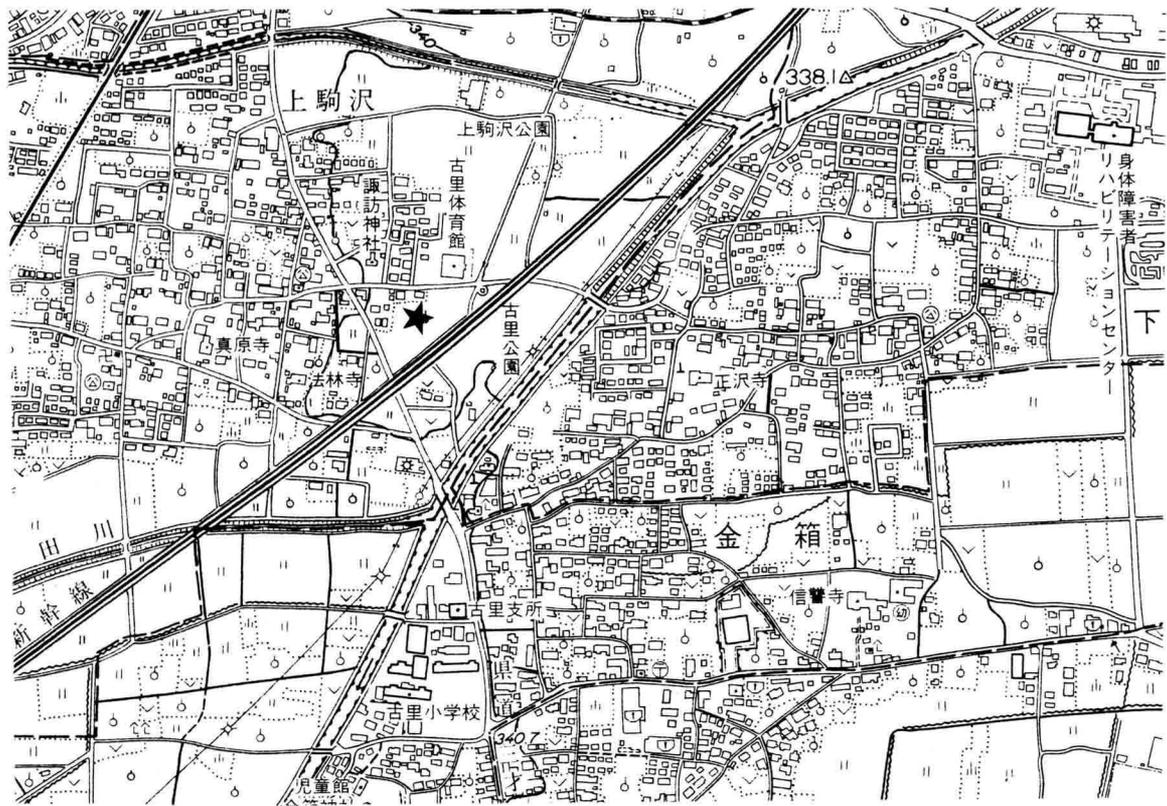
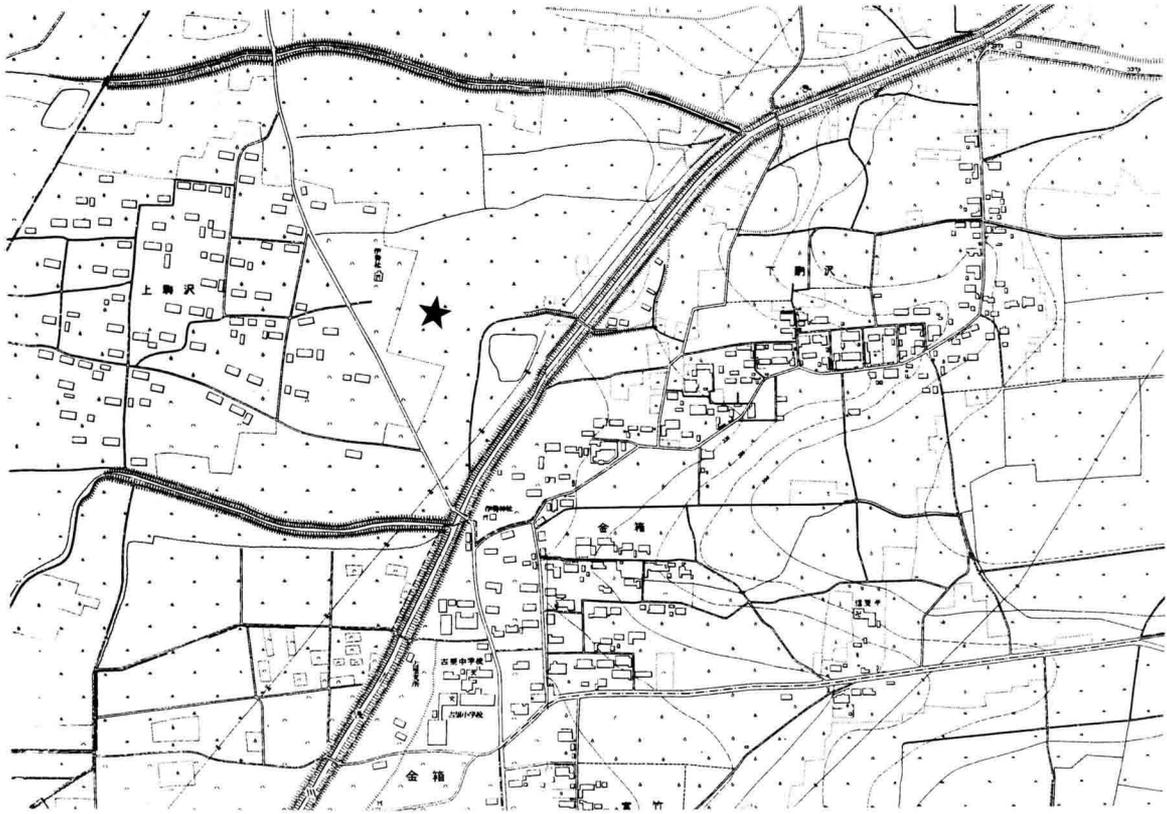
Ⅱ 調査地周辺の環境

1 地理的環境

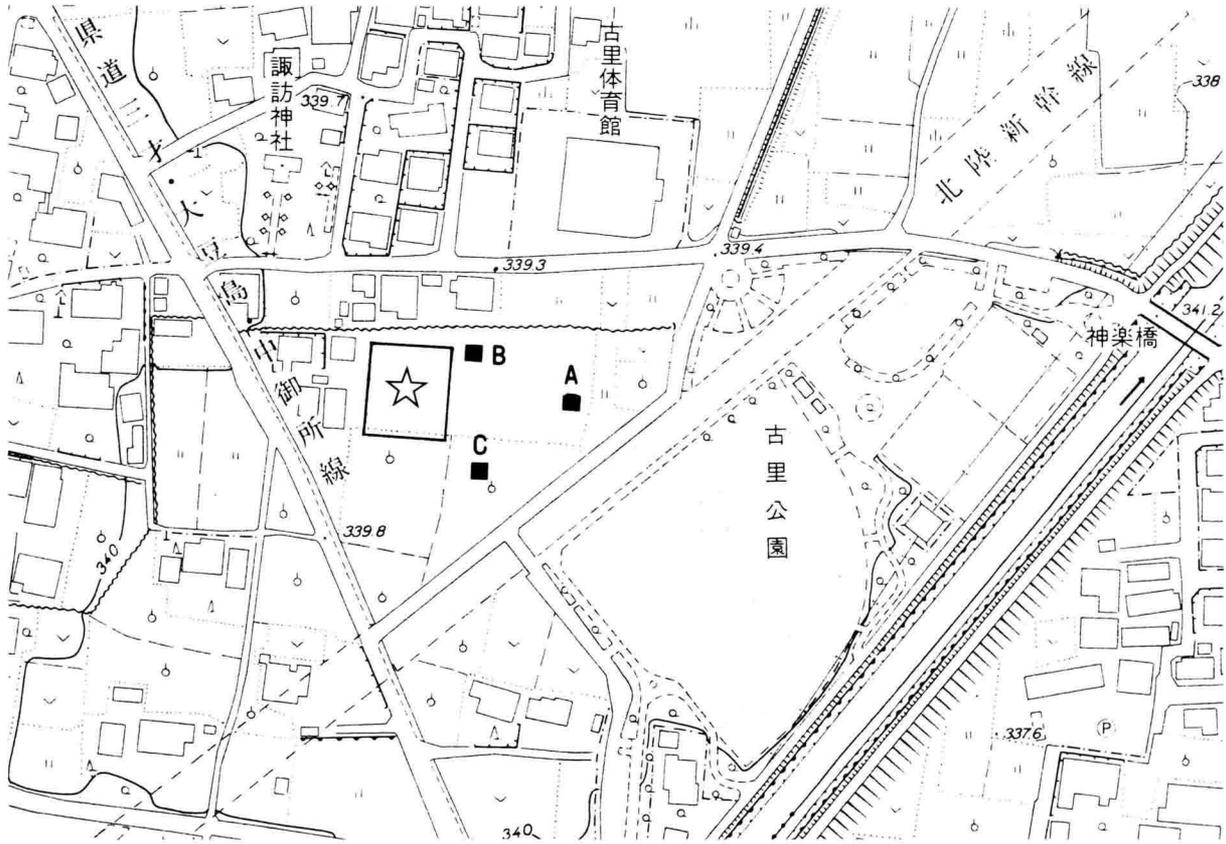
飯縄高原の湧水を集めた大池や猫又池等を水源とする浅川は、長野市北域で裾花川扇状地と複合して広大な扇状地を形成している。また、浅川は急峻な西部山地を削り峡谷をつくりながら流下し、大量の土砂堆積物を長野盆地にもたらしめている。扇状地は浅川真光寺を扇頂にして、地附山山麓から三登山山麓にかけて展開し、扇端部を上駒沢・富竹・石渡地籍のラインにもとめる。傾斜は南東方向を主軸とした平均斜度1分の45を計測する。端部の東側の一部は旧千曲川の小島・柳原地籍の自然堤防と後背湿地に接し平坦化する。駒沢城跡は扇端部に近い平坦面に位置する。現在の浅川の流路は扇頂から南東方向に流下していたものが調査地を取り巻くように北東方向に屈曲する。古来からこの流路であるならば、千曲川の影響を受けているものと思われる。すなわち調査地周辺は旧千曲川が形成した微高地形である可能性が高い。大正15年測量図（1図）から周辺の地目をみるに諏訪神社南面は畑、西方は果樹園になり、これらの外縁を水田が取り囲むように展開している。このことから調査地周辺は微高地であることを裏付ける。しかし、字境図では調査地は字寺浦であり、地形的字名は読みとれない。ただし、隣接して向流・土腐などがあり、水や低湿地に関係ありそうな字名があることに注意がむく。



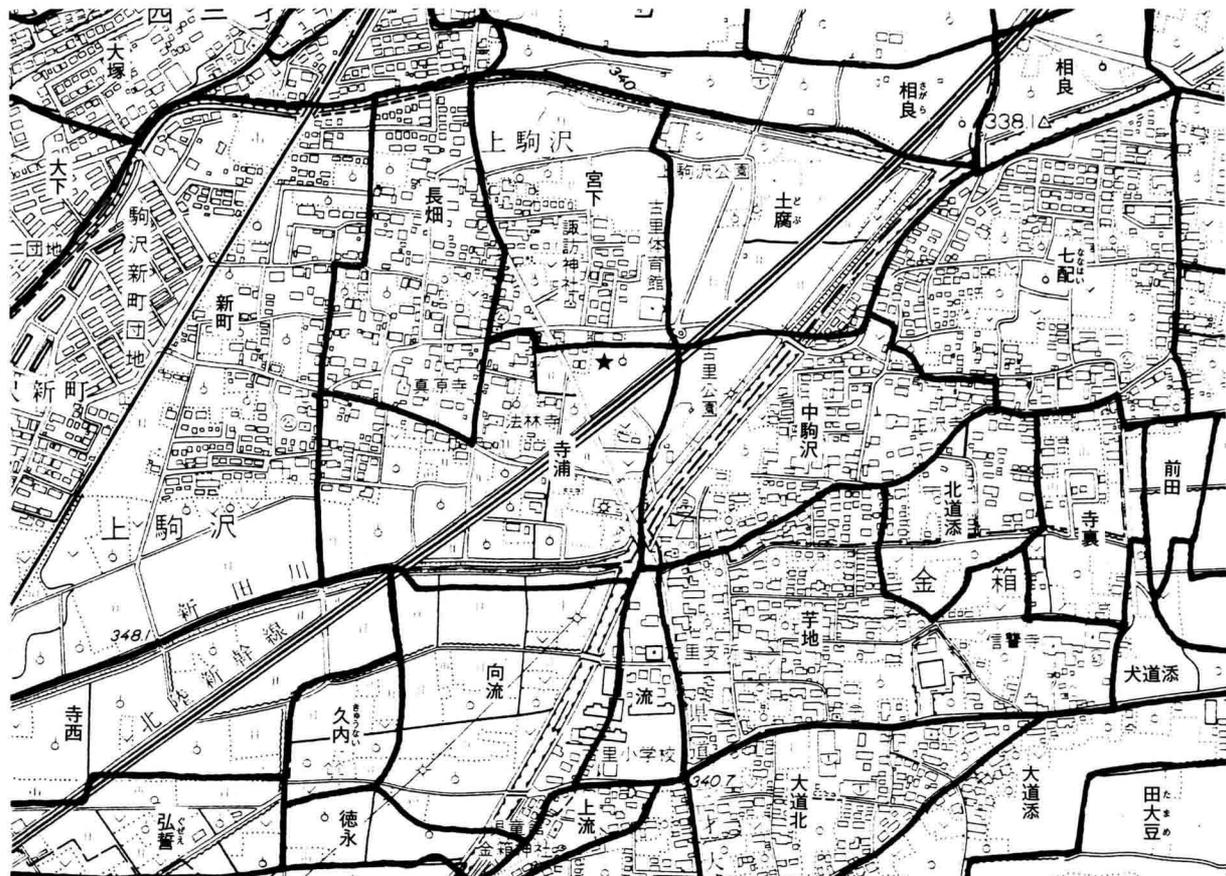
Ⅱ-1 調査地周辺の航空写真（平成2年撮影、(株)ジャステック）



1図 調査地及び周辺地形図 (1:10,000)
 (上) 大正15年測図・昭和27年修正図



2図 調査地及び試掘坑位置図 (1 : 2,500)



3図 調査地周辺の字境図 (1 : 10,000)

2 考古学的環境

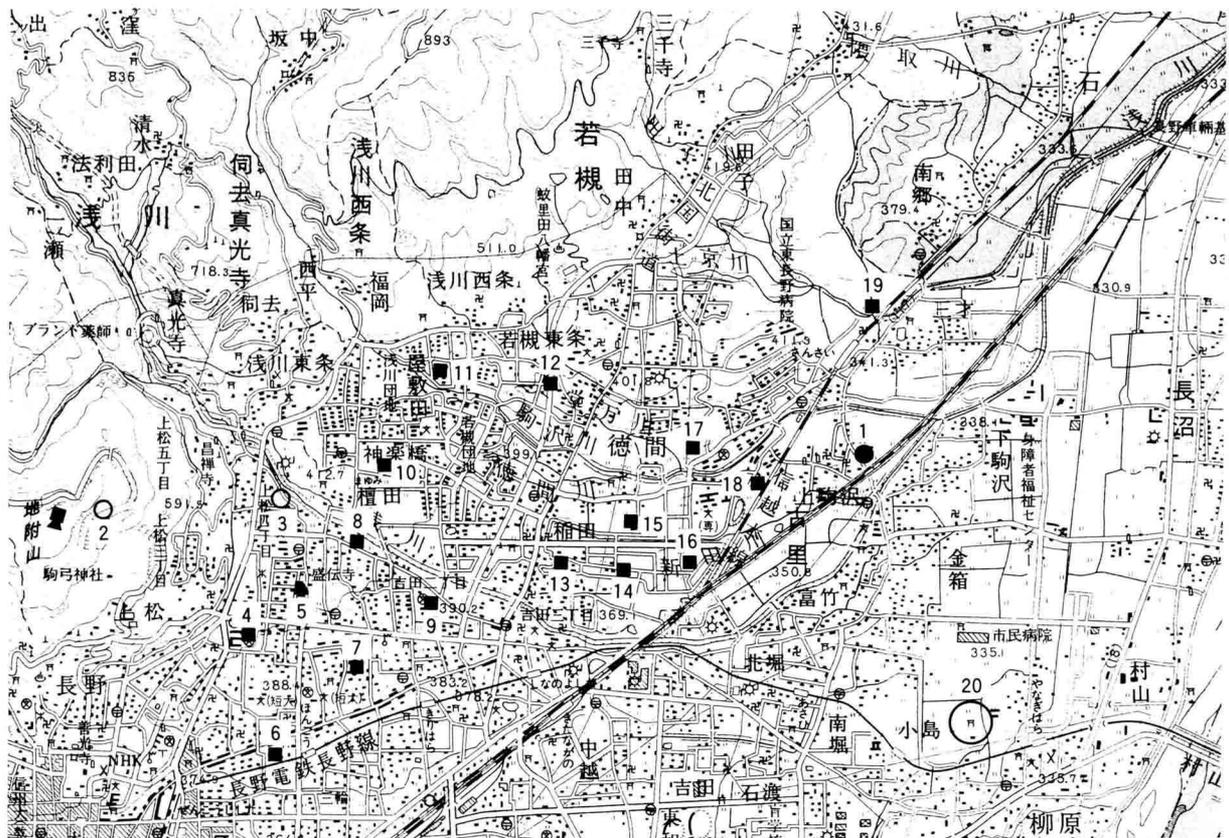
浅川扇状地に展開する発掘調査歴のある周辺の遺跡を抽出する。浅川以東の自然堤防上に位置する水内坐一元神社遺跡等は「中俣遺跡Ⅲ」で記載する。

扇状地には多くの遺跡が存在し、それらを一括して浅川扇状地遺跡群と呼称している。群としての把握は市街化が進んでおり、遺跡内の一部分を調査したにすぎない遺跡が多く、面としての埋蔵文化財包蔵地を確認できないことによる。以下時代別に瞥見する。

旧石器時代の遺物は飯縄高原の大池・猫又池周辺で採集されているが、扇状地内からは確認されていない。

続く縄文時代は湯谷・牟礼バイパスA地点・徳間榎木田・浅川端等の遺跡が確認されている。これらは浅川と駒沢川の流域周辺で、扇状地扇央より上部に位置する傾向がある。発掘調査歴のある遺跡としては前者に牟礼バイパスA地点遺跡、後者に浅川端遺跡がある。牟礼バイパスA地点遺跡では前期前葉の住居址1軒、浅川端遺跡では同時期の住居址1軒・土坑1基が検出されている。

浅川扇状地の開発と集落の形成は弥生時代から本格化したものといえる。主要な遺跡には徳間小学校遺跡・二



- 1 駒沢城跡
- 2 地附山古墳群
- 3 湯谷古墳群
- 4 本村東沖遺跡（長野高校地点）
- 5 本村東沖遺跡（上松東団地地点）
- 6 三輪遺跡
- 7 下宇木遺跡
- 8 浅川端遺跡
- 9 吉田高校グラウンド遺跡
- 10 神楽橋遺跡
- 11 浅川西条遺跡
- 12 牟礼バイパス遺跡
- 13 稲添遺跡
- 14 本堀遺跡
- 15 徳間小学校遺跡
- 16 二ツ宮遺跡
- 17 本堂原遺跡
- 18 駒沢祭祀遺跡
- 19 三才田子遺跡
- 20 小島柳原遺跡群

4 図 浅川扇状地の主要遺跡分布図（1：50,000）

ツ宮遺跡・本堀遺跡・牟礼バイパスD地点遺跡・神楽橋遺跡・浅川端遺跡・吉田高校グランド遺跡・本村東沖遺跡・本堂原遺跡等がある。徳間小学校遺跡では中期終末の住居址2軒が検出されている。二ツ宮遺跡・本堀遺跡では中期後半の住居址・土坑・溝址等が確認されている。牟礼バイパスD地点遺跡では中期栗林式期の住居址4軒・土坑1基、浅川端遺跡では同時期の住居址2軒・土器集積遺構1基が検出されている。本堂原遺跡では住居址4軒・溝址1条を確認している。ともに従来不明瞭であった栗林期前葉のもので該期の資料として重要である。集落遺跡としては吉田高校グランド遺跡・二ツ宮遺跡・本村東沖遺跡があり、後期初頭から中葉おける集落形態の推移を示す好例である。特に吉田高校グランド遺跡は後期初頭吉田式土器の標識遺跡で、第3次調査では住居址10軒からなる当該期の単一集落が良好な状態で検出されている。また、二ツ宮遺跡では吉田高校グランド遺跡に継ぐ時期の単一集落が確認されており、今後の集落遺跡研究に良好な資料を提示している。後期後半の箱清水式期の遺跡はその存在が希薄で、神楽橋遺跡や下宇木遺跡が知られているにすぎない。少なくとも現状では中期・後期前半・後期後半の各時期の大規模集落とが分布上一致することはない。この状況が善光寺平の他の地域にもあてはまるかどうか不明であるが、その背後には生産もしくは生活様式の差異といった根本的な要因が認められる可能性があり、今後の重要な検討課題である。ただし、扇状地という地形的な特色が水田等の生産遺構の検出に不向きな点も問題解決を遅らしている要因でもある。墓制に関しては本堂原遺跡から中期の礫床墓4基が調査されており、本村東沖遺跡（上松東団地地点）から後期の円形周溝墓・木棺墓群が検出され鉄釧・銅釧・管玉等が出土している。

古墳時代に入り浅川扇状地の遺跡を特徴付けるのは中期集落の展開であろう。長野市指定史跡の駒沢祭祀遺跡をはじめとして、近年牟礼バイパスB地点遺跡・下宇木遺跡・二ツ宮遺跡・本村東沖遺跡など良好な集落遺跡の調査例が増えており、その集中度は善光寺平の中でも特異な在り方を示している。特に本村東沖遺跡（長野高校地点）では中期から後期にかけての住居址56軒を検出し、大型住居址の集中・古式須恵器の大量保有・石製模造品の製作・子持勾玉や土鈴等の祭祀遺物の保有といった特色を有する。その集落規模からしても当該期中核的集落といえる。さらに前記した諸遺跡では陶器編年I型式2段階から4段階に対応すると考えられる古式の須恵器が比較的集中して出土する傾向が顕著であり、この点も善光寺平では特徴的である。犀川以北の盟主的な古墳群である地附山古墳群の保有した大量の須恵器の出土を考えると、当該期における浅川扇状地遺跡の重要性がにわかにクローズアップされてこよう。扇状地内にも古墳群が展開している。7基で形成される湯谷古墳群である。この内2基が発掘調査され、1号古墳は後期後半の典型的なもので、奥壁に巨石を据えた横穴式石室構造の主体部になる。数回の追葬が認められ、多量の馬具・武器類・須恵器等が出土している。本堂原遺跡から墳丘が削平され周溝のみ残す円墳1基が検出され、中期後半に位置付けられている。

古墳時代後期から平安時代にかけては比較的継続して集落が展開する。浅川西条遺跡、牟礼バイパスB・C・D地点、三輪遺跡に代表される。ただし、大規模集落が長期間にわたって同一箇所が存在するのではなく、時期毎に立地を異にしつつ中核的な集落が形成されている可能性が高い。扇状地の遺跡からはずれるがJR三才駅北側に三才田子遺跡がある。掘立柱建物址等が確認されており、古代東山道越後支道の多胡駅家と推定されている。

発掘調査歴はないが、平安時代末期にはこの地域に信濃28牧のうち吉田牧が設けられており、駒弓・桐原牧神社・駒沢などの呼称はその名残と考えられている。広大な扇状地は好適な放牧地であったと思われる。

これまた発掘調査歴はないが、中世のこの地域は若槻庄の領域になり、若槻里城をはじめ本堀・押鐘・相ノ木・平林・和田などの城館跡が点在する。

〔参考文献〕 長野市の埋蔵文化財第2集『浅川西条遺跡』1976年

第6集『三輪遺跡―〔付〕水内坐一元神社遺跡―』1980年

- 第9集『四ツ屋遺跡（第1～3次）・徳間遺跡・塩崎遺跡群（3）』1980年
 第10集『湯谷古墳群・長礼山古墳群・駒沢新町遺跡』1981年
 第12集『浅川扇状地遺跡群牟礼バイパスA・E地点遺跡』1982年
 第17集『浅川扇状地遺跡群牟礼バイパスB・C・D地点遺跡』1986年
 第20集『三輪遺跡（2）』1987年
 第22集『吉田高校グランド遺跡』1987年
 第29集『浅川扇状地遺跡群浅川端遺跡』1988年
 第30集『地附山古墳群』1988年
 第38集『栗田城跡・下字木遺跡・三輪遺跡（3）』1991年
 第47集『浅川扇状地遺跡群二ツ宮遺跡・本堀遺跡・柳田遺跡・稲添遺跡』1992年
 第49集『浅川扇状地遺跡群三輪遺跡（4）』1993年
 第50集『浅川扇状地遺跡群本村東沖遺跡』1993年
 第65集『浅川扇状地遺跡群牟礼バイパスB地点遺跡（2）』1994年
 第67集『浅川扇状地遺跡群本村東沖遺跡Ⅱ』1995年
 第69集『浅川扇状地遺跡群本堂原遺跡』1995年

3 駒沢城跡について

明治11年から15・6年頃までに執筆され、昭和11年5月に発行された『長野縣町村誌北信篇』から上駒沢村の項より駒沢城跡関係分を転載する。「[駒沢刑部城址] 本村の辰の方字寺浦（俗にタカデツキと云ふ）に在り、外郭隍井共に頽廢し、方今耕地となる。城主事跡不詳。」とある。昭和30年刊行の『古里村誌』から少し長くなるが引用する。「駒沢城跡 上駒沢の東方に諏訪神社があり、その神社の南一帯の地を駒沢城跡という。ここは今耕地と何等昔の遺跡を見るべきものはないが、地区の名称を内堀と称しておりその東の旧浅川の堤防を二の郭と云っている。旧巡查駐在所（現上駒沢共同作業所）の隣の地を御倉屋敷と称している。『科野佐々礼石』の所記によれば「駒沢刑部籠居の館として暦応元年より天文3年まで7代居住とあり」「尚水内郡（上水内郡）39ヶ所、旧址の部に駒沢と題し、暦応元年、駒沢刑部、足利尊氏に属し、当所に居城を構え、其の後、村上家に属す、天文3年村上中務大輔義国の下知に随わず之に依って、葛尾の城に於いて駒沢刑部を誅せしむとあり。（以下中略）。水内群横山の部に次の記事がある。「村上左京大夫源頭国の長臣横山山城守、仮寝の岡（長野城山）に城地を構え居り、天文慶、駒沢刑部に組みし、我意に誇り、村上の下知に随はずこれに依って天文3年3月没所せしむ、右の記事によれば駒沢刑部の終焉は天文3年で在ることが云える。」とある。

以上管見できる範囲での駒沢城跡についての文献から、駒沢城跡は伝承されてきた遺跡であることがわかる。字境図からも城跡・居館跡に関わる字名がでてこなく、伝承字名のみが残されている。字寺浦の俗称タカデツキのタカが接頭語とすれば高い所の地形的な意味が在るように思う。また『町村誌』でいう「上駒沢の地勢は「諸川々敷高く、霖雨毎に洪水横溢し、為に耕地を損すること多し。」と、金箱村の地勢は「浅川、弘誓川の二水、村の中央を串流北下し、川敷全村の耕地より高し。故に平水微々たりと雖も、夏秋洪水の都度堤防を崩し、大に水害を為すあり。」と記載されている。浅川が荒れ川でたびたび洪水を起こしていたことがわかる。駒沢城が構築されていた頃、浅川が現状の位置を流下していたならば当時も水害の被害をこうむっていたものと推測される。果たして城または居館として存続しえたであろうか。

Ⅲ 調 査

1 試掘調査

平成6年10月17日に実施した調査報告書から略記転載する。

調査は事業予定地内の任意の3地点にA～Cの試掘坑(2図)を設定し、小型重機により掘削を行った。事業予定地は駒沢城跡として周知されている遺跡である。北陸新幹線建設ならびに古里公園造成事業に伴う周囲の調査所見から総合して考えるに、B・C試掘坑は駒沢城跡の主体部に、A試掘坑は外堀付近に位置するものと想定される。

A試掘坑 古里公園造成事業地点の調査所見から本試掘坑は駒沢城跡外堀もしくは外堀のやや内側に位置するものと思われる。第6層の黒灰色粘質土が遺物包含層で、中世の内耳土器が数点出土した。C試掘坑で認められた駒沢城跡構築に伴う盛り土造成面およびその

上部に存在する遺物包含層は確認されない。これは外堀に近接するためにこの付近まで人為的な盛り土造成が行われていないためと思われる。

B試掘坑 駒沢城跡外堀部分に位置するものと思われる。現状は第2層の埋め戻し土によって、城跡主体部と考えられる南側の果樹園と同一レベルをなしている。埋め戻し以前は外堀部分が埋まった後も凹み状を呈していたものと推測される。第5層以下の堆積土が外堀部分の埋没土と考えられる。

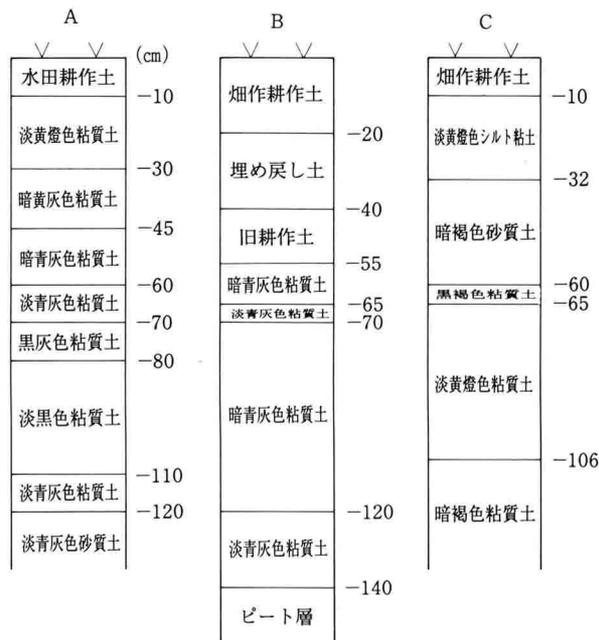
C試掘坑 駒沢城跡主郭内に位置すると推定される。B試掘坑でみられた最近の盛り土層は認められず、旧地形もA・B試掘坑に比べ高い場所になる。第4～6層が遺構面と考えられ、特に第5層の淡黄橙色粘質土は人為的な盛り土整地面と考えられる。駒沢城跡造成に関わる整地面であろう。第4層は駒沢城後の遺物包含層、第6層は造成以前の遺物包含層と考えられる。

以上の所見より事業予定地は当初の想定とおり駒沢城跡の範囲内に位置することは確実であり、事業着手前に埋蔵文化財の発掘調査が必要である。

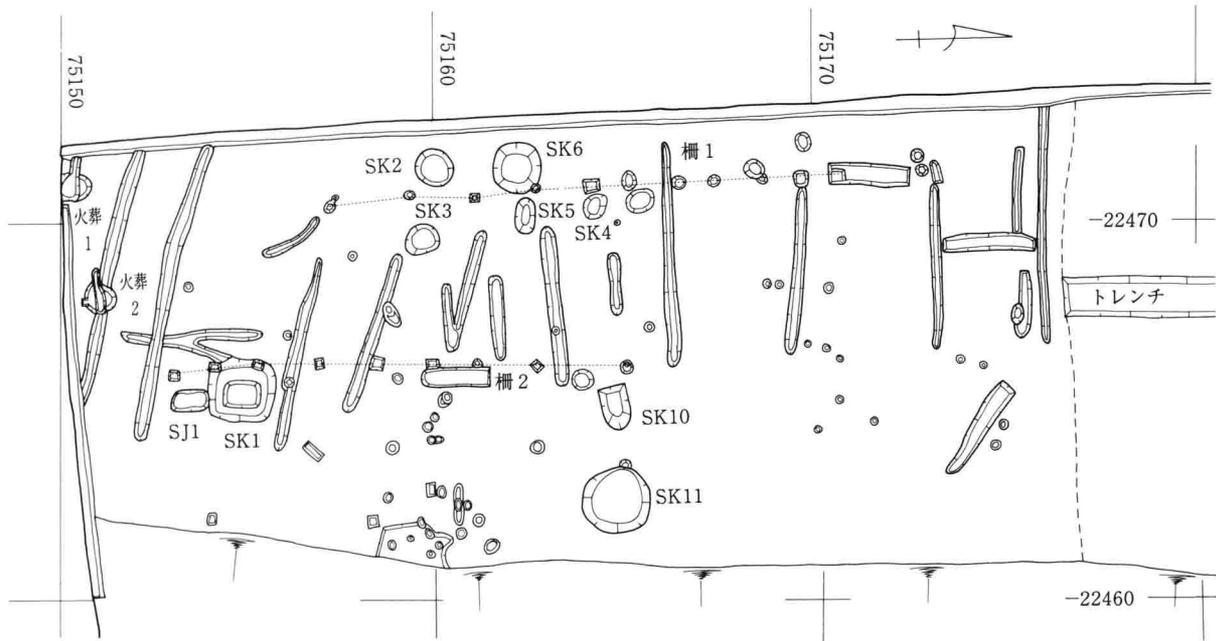
なお、今回の試掘調査では駒沢城構築以前の下の埋蔵文化財については、城跡遺構面の破壊を極力避けるために調査を実施していない。周辺の調査所見から主郭部には弥生時代から平安時代の遺構の存在が予想される。

2 1次面の遺構と遺物

現地表面から約65cm掘削した所に室町時代後期と推定される1次面が展開する。東側半分程は地形傾斜に従い黒色系砂質土層が覆い遺構の存在が判然としない。堀跡はこの黒色系土層から掘り込まれている可能性が高い。この他に検出した遺構は土坑・溝址・火葬施設址・土壙墓および小穴からなる柵址等がある。



5図 試掘坑土層柱状図



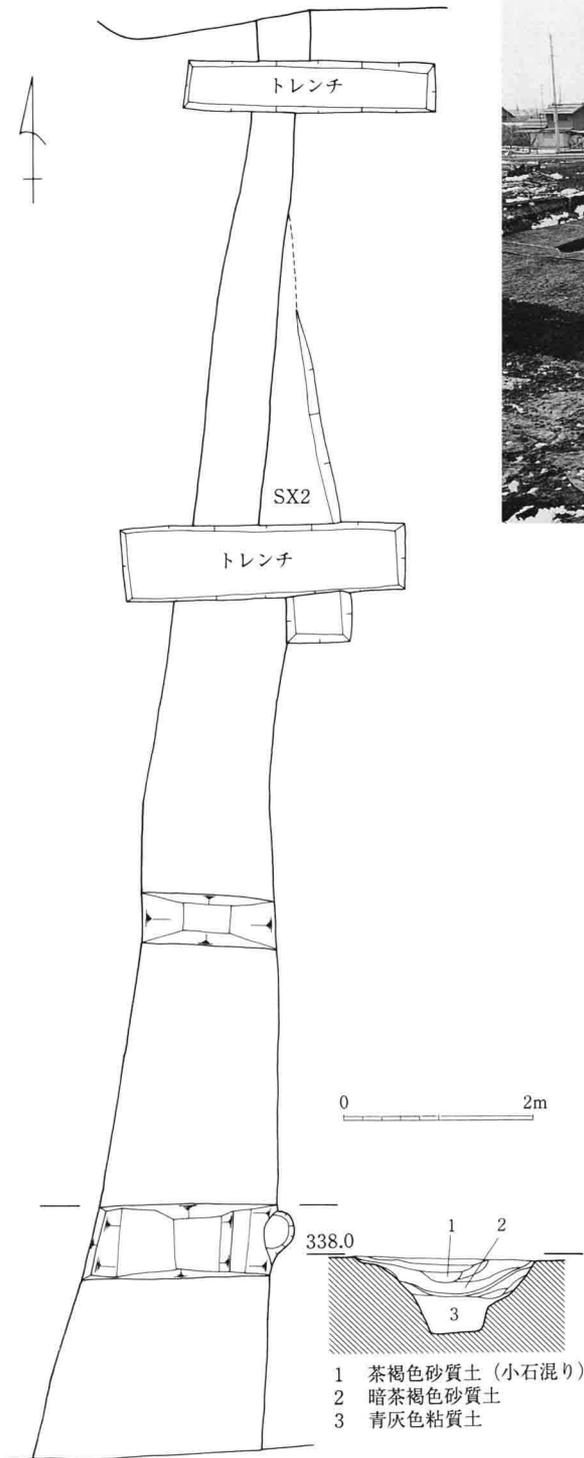
6図 1次面の遺構分布図 (1:200)



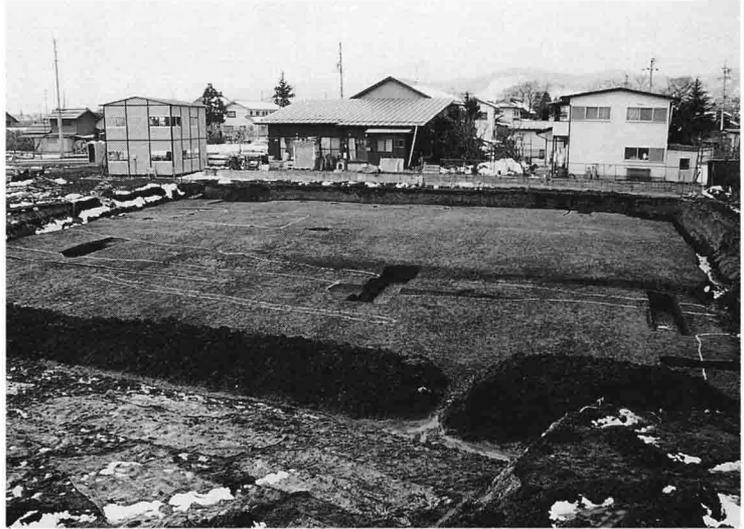
Ⅲ-1 1次面の遺構

(1) 堀跡 (7図)

1次面では明確に把握できなかったので2次面から調査所見を記載する。遺構は調査地のほぼ中央に位置し、南北方向(N8°E)に掘られている。検出面での規模は4mと南に広く、北にいくに従い幅規模を減少し、北端では1mを測るにすぎなくなる。発掘調査では遺構の規模や調査日程等を考慮して4ヶ所にトレンチを設定し進行したが、湧水により底面まで露呈できたのは南側の2トレンチにすぎない。そのため詳細については不明な部分が多い。形態は南では2段掘りの様相を呈し、下段はU字形態になる。北のトレンチでは上段の緩傾斜の掘り込みはみられない。深さも北より南側のほうが深くなる傾向がうかがえ、南端では底面まで1.6mを測る。堀機能としては3段階あるものと思われ、初源のものは水を湛えていた可能性が高く青灰色粘質土が堆積している。



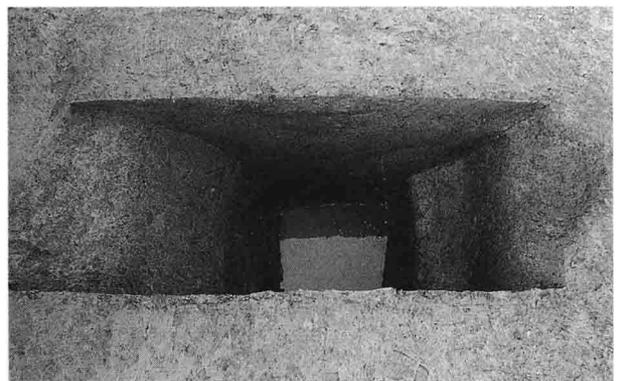
7図 堀跡実測図 (1:160)



Ⅲ-2 堀跡遠景 (中央)



Ⅲ-3 堀跡堆積土層



Ⅲ-4 堀跡

その上部に深さ0.8mのものが2回目の堀としての機能が考えられるものの、最終的には幅・深さともに規模を著しく減じて溝的になってしまい終焉を迎える。3段階変遷の時期は不明である。

遺物の出土量は少なく、中世的な土器として内耳土器の小破片があるにすぎない。

(2) 土坑 (8図)

1号土坑 調査地の南端近くに位置し、土墳墓・2号柵址と重複関係にあるものの新旧は不明である。形態は

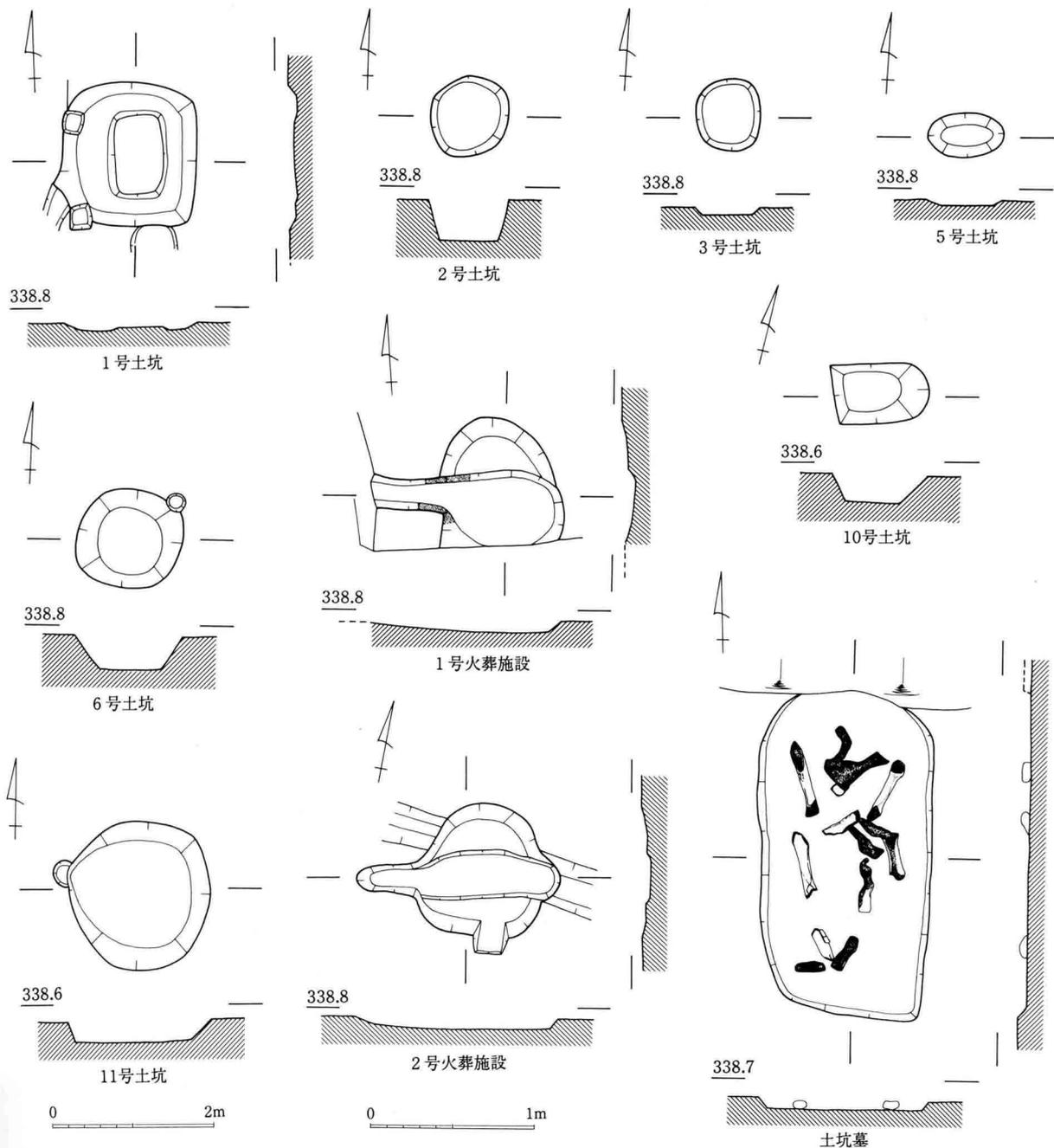
隅丸方形を呈し、南北1.8m・東西1.7mの規模になる。検出面からの掘り込みは浅く10cmにすぎず、遺構の中央付近は長方形に4cm程の高まりをみせる。遺物の出土はない。

2号土坑 調査地南側土坑群の一つで、北に6号土坑・東に3号土坑と隣接する。形態は円形を呈し、最大幅1.5m・深さ50cmの規模になる。底面は平坦で軟弱である。遺物の出土はない。

3号土坑 形態は円形を呈し、最大幅0.9m・深さ10cmを測る。底面は平坦で軟弱である。遺物の出土はない。

5号土坑 6号土坑の東に近接する。形態は楕円形を呈し、長軸0.95m・短軸0.55m・深さ8cmの規模になる。底面は平坦で軟弱である。遺物の出土はない。

6号土坑 形態は円形を呈し、最大幅1.3m・深さ45cm程の規模になる。底面は平坦で軟弱である。遺物は平安



8図 1次面土坑 (1:80)・火葬施設 (1:40)・土坑墓 (1:20) 実測図

時代に比定される完形の土師器坏（15図25）が出土しているが、中世遺構検出面の遺構とゆう状況から混入遺物と考えられる。

10号土坑 調査地南側土坑群の一つであるが、11号土坑と共に東側に位置する。形態は東壁が丸味を帯びる長方形を呈する。長軸1.15m・短軸0.74m・深さ32cmを測る。底面は平坦で軟弱である。遺物の出土はない。

11号土坑 10号土坑の東に隣接する。形態は円形を呈し、直径1.9m・深さ25cmの規模になる。底面は平坦で軟弱である。遺物の出土はない。

(3) 溝址（6図）

中世遺構検出面に東西方向に掘られた幅40cm未満・深さ数cmから20cm程の溝がほぼ全面に認められた。用途は不明であるが、2列の柵址との関係も方向および規格性から考えにくい。むしろ同一の方向性があり、短く集結の在り方が似ていることから数次にわたる耕作によるもの思える。出土遺物には弥生時代中期の栗林式期の土器片があるが、混入品である。

(4) 柵址（6図）

1号柵址 調査地の西側に位置し、南北方向に展開する。方形と円形の小穴を結ぶ全長13.5mを抽出する。小穴の規模は20～30cmで、深さ10数cmから40cm代のものであり一様でない。小穴間も1～2mと規格性が求められない。おそらく角材と丸太材を打ち込んだ柵と推定する。遺物の出土は認められない。

2号柵址 1号柵址から東にはほぼ併行して全長12m程が確認された。遺構の在り方は1号柵址と同様である。



Ⅲ-5 6号土坑



Ⅲ-6 1号火葬施設



Ⅲ-7 2号火葬施設



Ⅲ-8 土壙墓

二つの柵址が同時存在していた可能性は位置関係や方向性から少ないものと考えられる。出土遺物はない。

(5) 火葬施設（8図）

調査地の南端部から2基が確認された。施設の規模および骨片の大きさからして子供用と推定する。

1号火葬施設 遺構の南側は調査区域外に延びるため本体部の長軸規模は不明であるが、短軸は70cmを測る。全体の形態は凸形で、本体部は楕円形を呈するものと思われる。掘り込みは浅く数cmで丸底状になる。溝状突出部は煙道と思われ、本体部との接点付近は焼土塊化している。覆土には焼土・炭化物および被熱骨片が多量に含まれていた。他の出土遺物は認められない。

2号火葬施設 1号火葬施設の東に位置し、煙道方向は1号火葬施設と同様東西方向にある。全体の形態は凸形で、主体部は不整形円形を呈する。主体部の規模は南北85cm・東西75cm・深さ6cmで、中央に全長125cm・深さ10cm程の溝状煙道が設けられる。遺構全体に焼土がみられるが、焼土塊化している部分は確認されない。覆土には1号火葬施設同様多量の被熱骨粉が認められた。

(6) 土壌墓（8図）

調査地の南端に位置し、1号土坑と重複関係にある。形態は隅丸長方形を呈し、長軸（南北）約1m・短軸0.55m・深さ4cmを測る。底面は平坦で軟弱である。残存人骨は散乱状態で埋葬形態は不明であり、頭蓋骨も確認されない。遺構の深さが浅いこともあり耕作等により後世に攪乱を受けた可能性が高い。副葬品はみられない。

(7) 検出面の遺物（16図）

出土遺物は少なく、瀬戸美濃産と推定される灰釉浅鉢（38）・染付碗（39）、漆器碗（40）および有孔石製品（41）が出土している。漆器は黒色土層からの出土で唯一掘跡に關与する遺物と考えられ、高台と口縁部を欠損している。体部の黒漆地に赤漆で重円紋とおぼしき文様が描かれている。有孔石製品の両面には研磨痕がある。

3 2次面の遺構と遺物

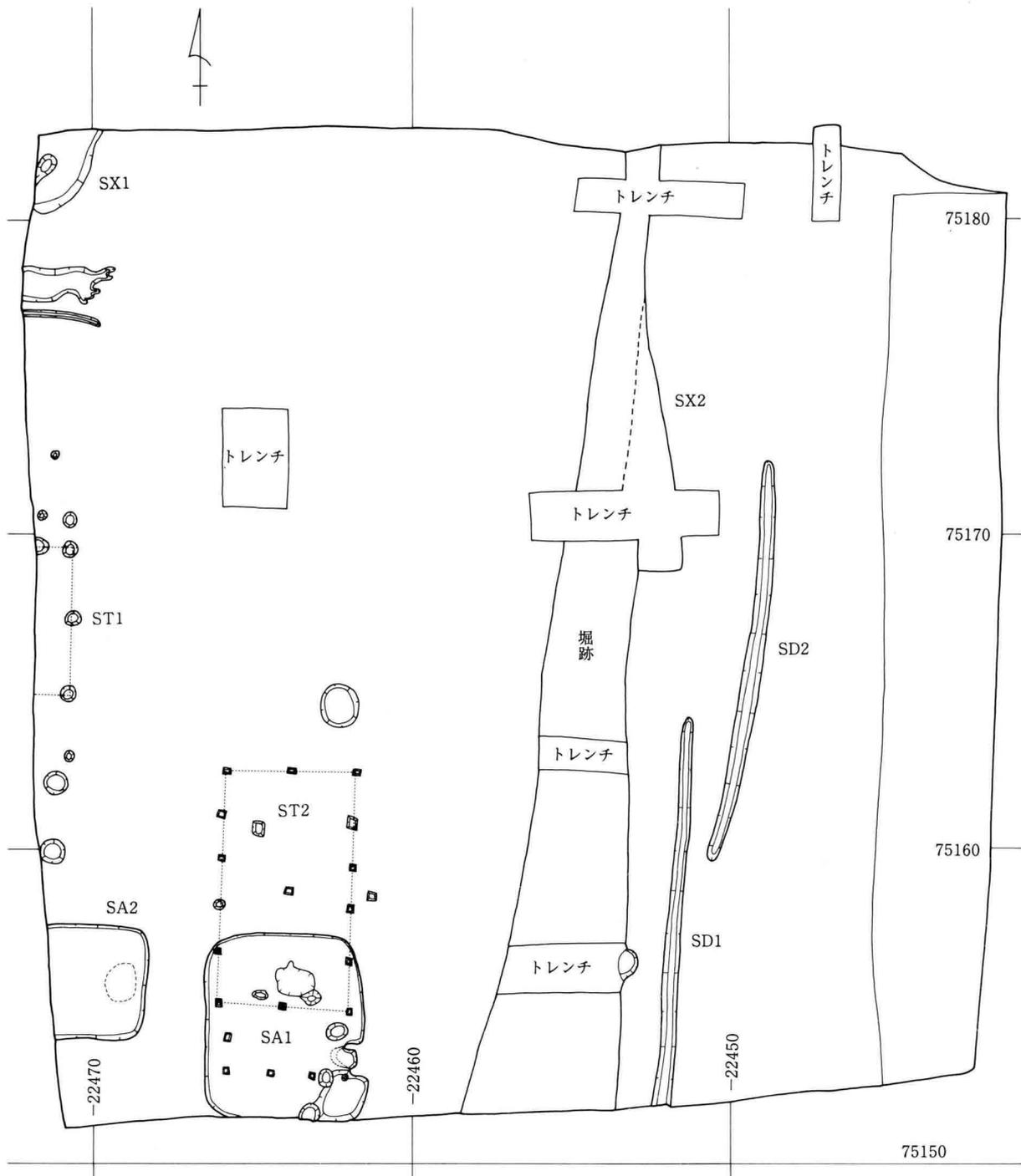
現地表下約90cmにて平安時代中頃の2次面を確認した。遺物包含層が明確でなく遺構形態の追求には苦慮したが、住居址2軒・掘立柱建物址2棟・溝址2条および2基の性格不明遺構を検出した。



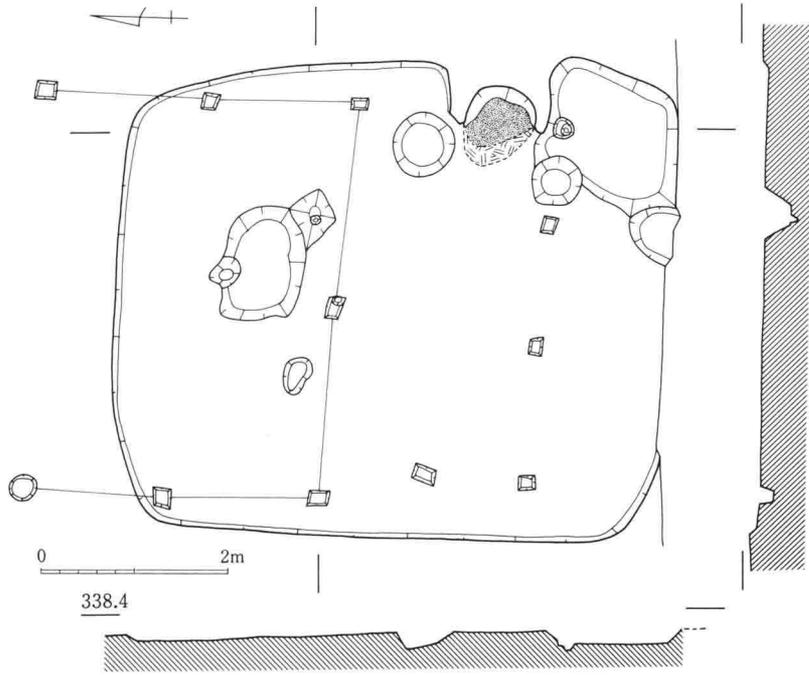
Ⅲ-9 2次面の遺構

(1) 住居址

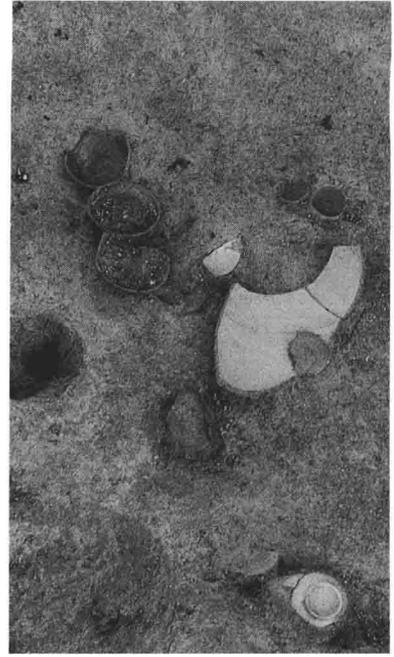
1号住居址(10図) 調査地の南端に位置し、南壁は調査区域外にある。2号掘立柱建物址と重複関係にあり、これよりも古い遺構である。形態は既存の検出形態から隅丸長方形と推定する。長軸は南北方向を指し、6m前後の規模で、主軸(短軸)は5mを測る。検出面からの掘り込みは浅く、各壁ともに10cmに満たない。カマドは東壁中央右寄りに両袖形のもの構築されているが、調査時には火床焼土と炭化物が確認されたにすぎない。カマドの右に浅い不整形な土坑状の落ち込みが認められ、貯蔵穴と考えられる。ここからの土器の出土は多い。床面は北および東側に傾斜を有し、炭化材や焼土で覆われていた。いわゆる焼失住居である。



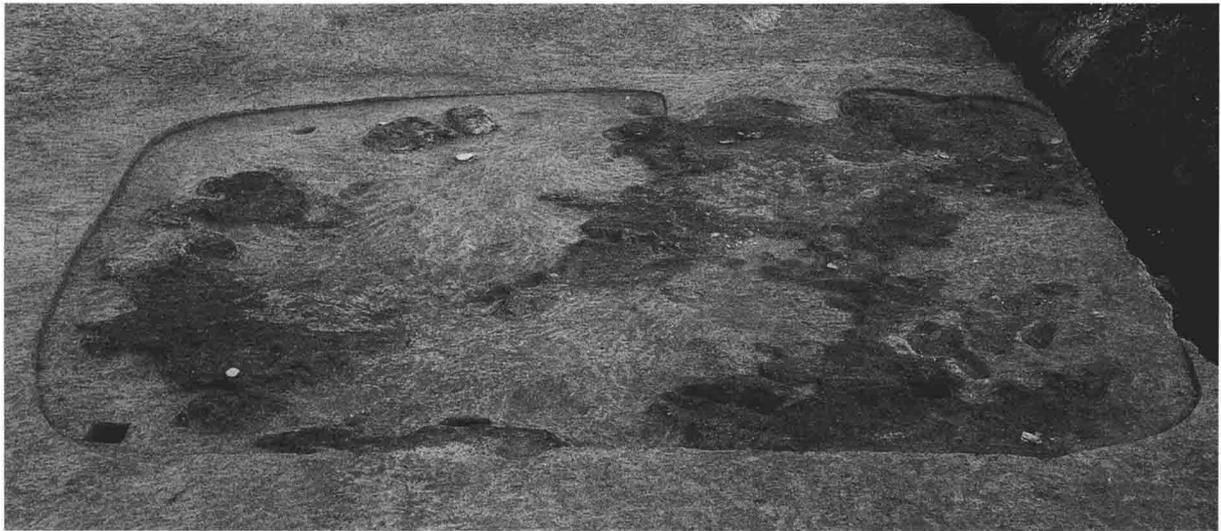
9図 2次面の遺構分布図(1:200)



10図 1号住居址実測図(1:80)



Ⅲ-10 貯蔵穴内の土器出土状態



Ⅲ-11 1号住居址炭化材残存状況



Ⅲ-12 1号住居址

遺物の出土は比較的多く、主として貯蔵穴からのものである（15図1・3・5・8・9～11・13・16・17）。器種には土師器坏（1～6）・鉢（16・17）・甕（18）、黒色土器碗（9～14）、灰釉陶器碗がある。坏・碗類はロクロ成形で、黒色土器の内面はヘラミガキが施されている。16・18の体部外面にもロクロ調整痕が認められる。

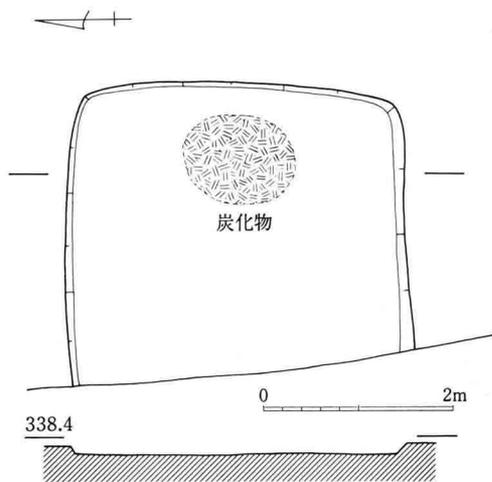
2号住居址（11図） 調査地の南端で、1号住居址の西に近接している。遺構の西側は調査区域外に延びている。形態は長方形を呈するものと推定する。長軸は東西方向にあるが規模は不明である。短軸は3.5m程、掘り込みの深さは13cmを測る。床面は平坦で軟弱である。カマド位置は不明であるが、東壁寄りに長軸1.2m・短軸0.9mの範囲に炭化物が集中して堆積していた。

遺物の出土量は少なく、全て破片出土である。器種には土師器坏（15図20）・甕、黒色土器坏（19）・碗がある。

(2) 掘立柱建物址

1号掘立柱建物址（12図） 調査地の西端から検出した遺構で、東端列付近を確認したにすぎない。建物址は南北方向に展開するものと思われるが、南北2間の規模になる他は不明である。南北軸の柱穴間は2.3mを測る。柱穴は直径40～50cmの円形を呈し、深さ25～30cmとほぼ一定の規模になる。この遺構の特色は礎石と推定される川原石が底面に据え置かれていることにある。いわゆる礎石建物址の部類に入るものである。遺物の出土はなく時期比定は困難であるが遺構面の状況から平安時代の所産と考えられる。

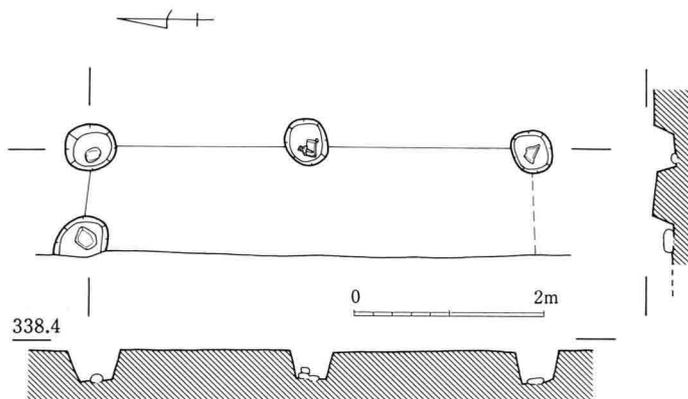
2号掘立柱建物址（13図） 1号住居址と重複関係にあり、これよりも新しい。柱穴は方形または円形を呈する小穴で、直接角材・丸太材を打ち込んでいる。1次面の柵列の在り方に似ており、中世遺構の可能性が高い。柱



11図 2号住居址実測図（1：80）



Ⅲ-13 2号住居址

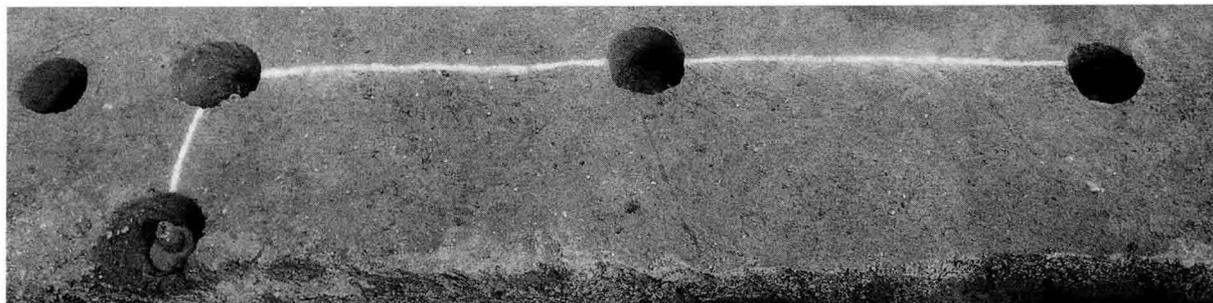


12図 1号掘立柱建物址（1：80）

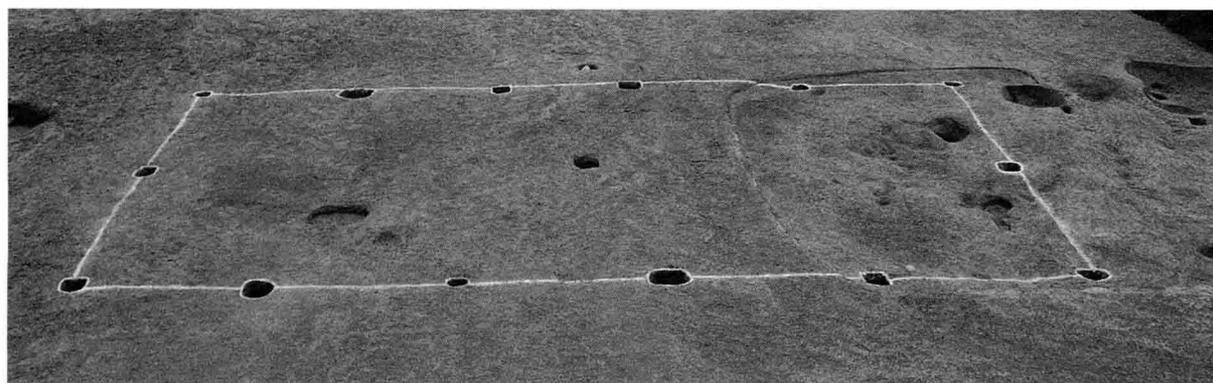


Ⅲ-14 建物址礎石

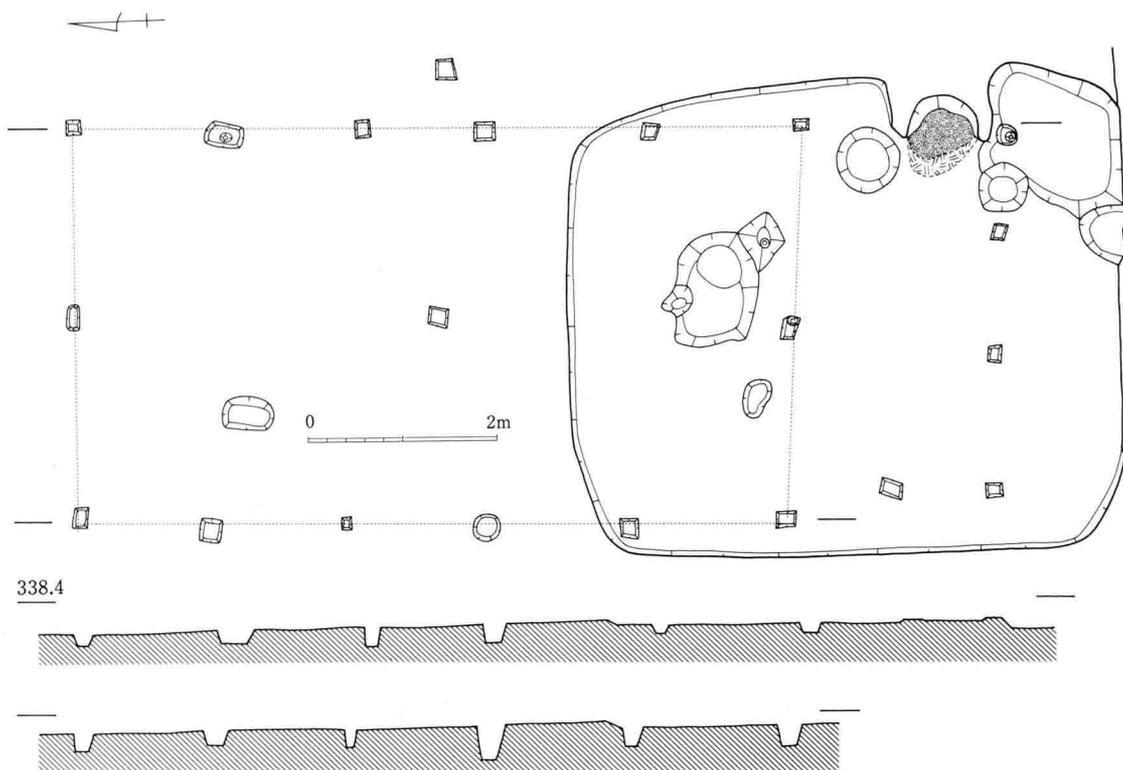
穴は長方形配列で、東西2間・4.15m、南北5間・7.6mの規模になる。ただし、1号住居址内の更に東側にも方形の小穴が存在するが、規格が整合せず付属施設または他の遺構と考えられる。東西の柱間は2.1mとほぼ同間隔であるが、南北では1.3~1.7mとばらつきがある。また、遺構の中央に方形小穴が認められ棟の支柱穴と考えられる。以上のことからこの建物址は簡易な小屋組の納屋的な用途が推測される。出土遺物は無い。



III-15 1号掘立柱建物址



III-16 2号掘立柱建物址



13図 2号掘立柱建物址 (1:80)

(3) 溝址 (9 図)

堀跡の東にほぼ並行して 2 条の溝址が確認された。1 号溝址は調査地より更に西側に延びているが、2 号溝址は調査地内で集結しており全長 13m を測る。共に幅 40～55cm で、深さ数 cm から 10cm 程度の浅い溝である。堀と関連する遺構と思われるが性格は不明である。遺物の出土はみられない。

(4) 性格不明遺構 (S X)

遺物の出土をみた遺構を記す。S X 1 (9 図) は調査地の北西隅に竪穴状遺構として検出されたが、住居址のような規格性がない。平安時代に比定される土師器坏 (15 図 21) が出土している。S X 2 (9 図) は堀跡と西側が重複関係にあり、堀跡規模内に収まる遺構であることがわかるがその他は不明である。出土遺物には土師器坏 (15 図 22・23)・黒色土器椀 (24) がある。22 は灯明皿で口縁部から体部に油煙痕が残る。

(5) 検出面の遺物 (16 図)

出土遺物は少なく、図示できるものは土師器坏 (35・36)、黒色土器椀 (37) があるにすぎない。

4 3 次面の遺構と遺物

現地表下約 160cm に古墳時代前期に比定される 3 次面がある。検出した遺構は 2 条の溝址と 2 個の小穴のみである。堀跡は北にいくほど浅くなり、2 号溝址に掘り込まれる。



Ⅲ-17 3 次面の遺構 (南より)



Ⅲ-18 3 次面の遺構 (東より)

(1) 溝址 (14・15図)

1号溝址 調査地中央に位置し、2号溝址と交差しており、これよりも新しい。深さの勾配から察するに北西から南東方向に調査地内で集結することなく確認長29mにわたり掘られている。規模においても北西端が幅85cm・深さ30cmに対し規模を縮小し、南西端では幅30cm・深さ20cm程になる。

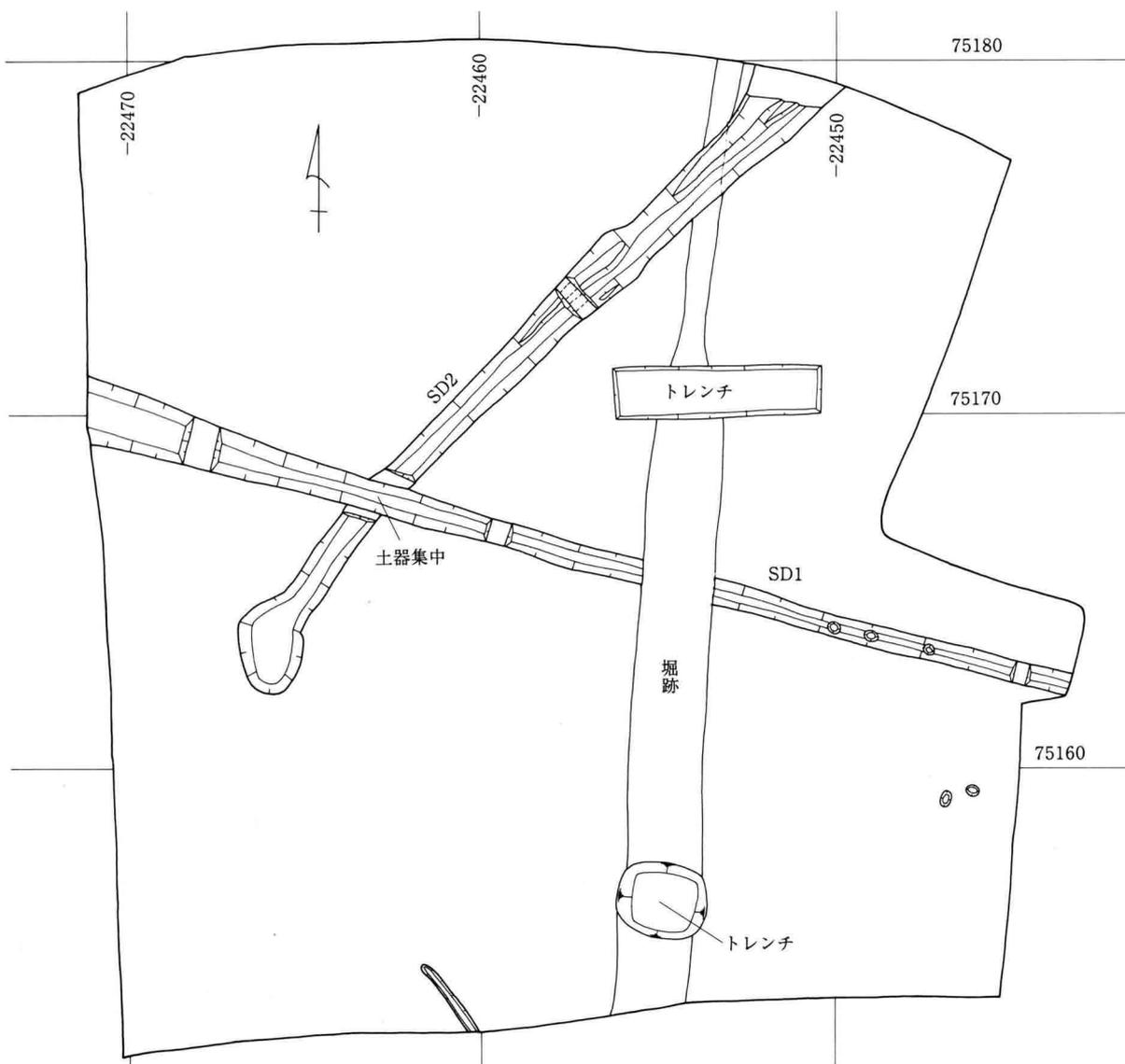
遺物は土師器が底面から破片状態で、壺 (15図26)・甕 (27・28) が3個体分出土している。壺は体部中位下に最大径があり、体部外面はヘラミガキ調整が施される。

2号溝址 南西から北東方向の溝で、南西端は調査地内で土坑状掘り込みをもって集結する。全長約23mを検出した。幅は0.9~1.1mを測る安定した規模で、深さも20cm前後とほぼ一定し明確な勾配にならない。

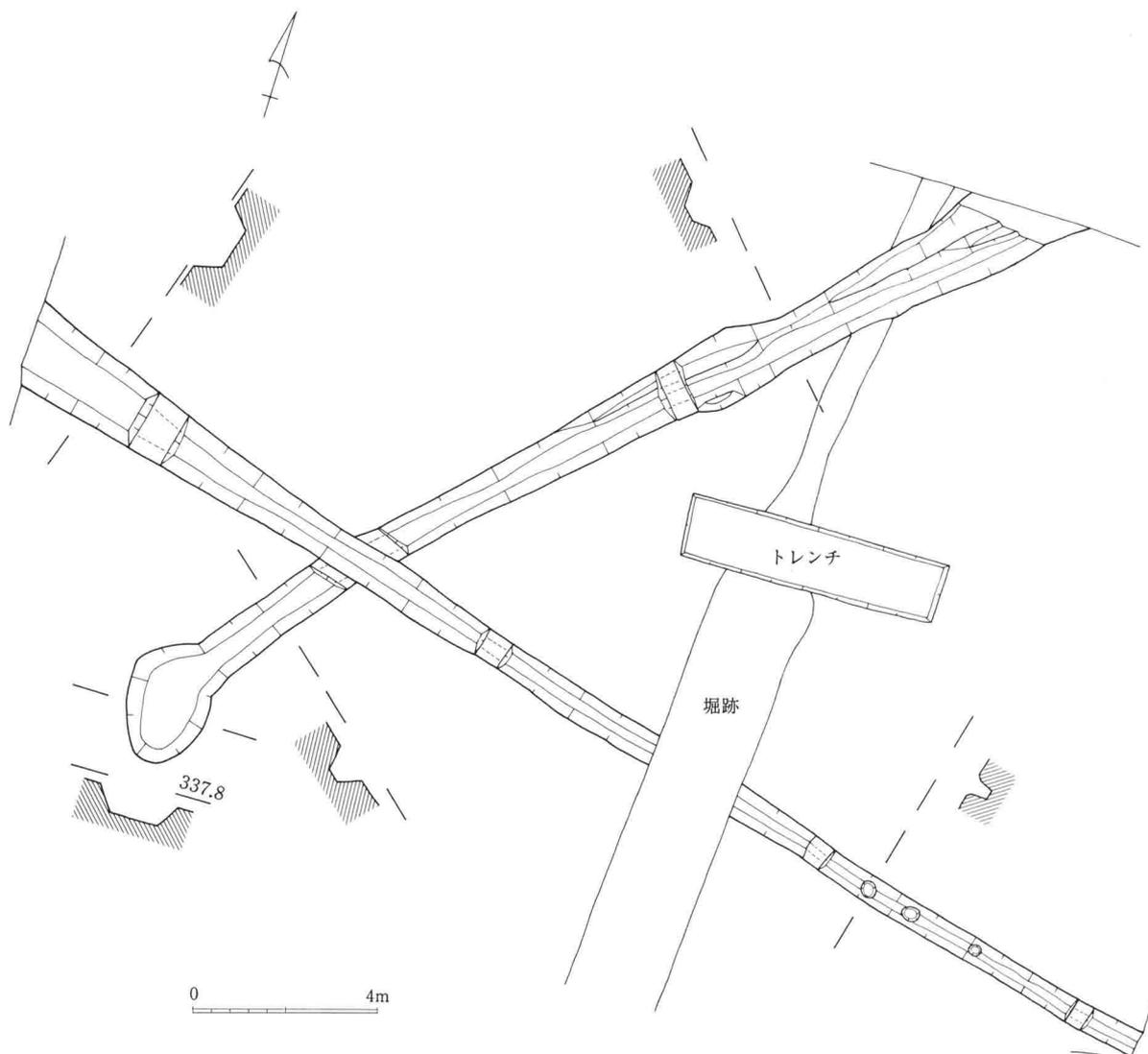
遺物は底面から破片状態で出土している。器種には図示した土師器高杯 (15図29・30)・甕 (31~33) の他器台・小型丸底鉢がある。

(2) 検出面の遺物 (16図)

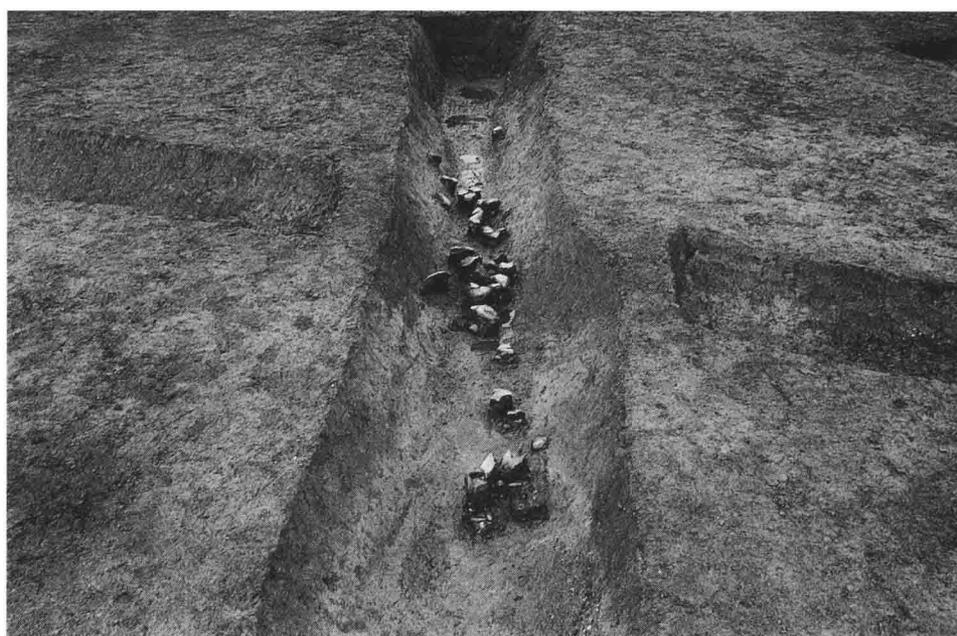
弥生時代後期の箱清水式期の甕 (34) が1個体単独で出土している。



14図 3次面の遺構分布図 (1:200)

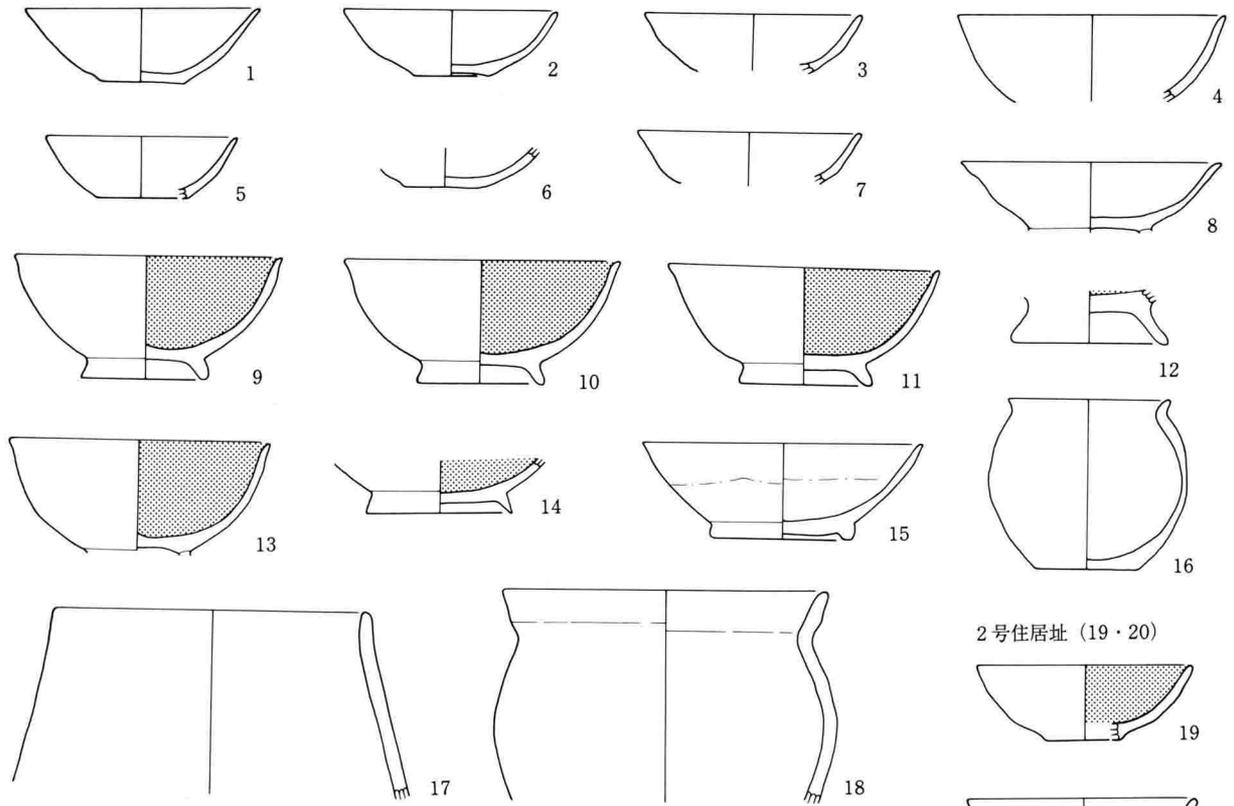


15図 3次面1号(下)・2号(上)溝址実測図(1:180)

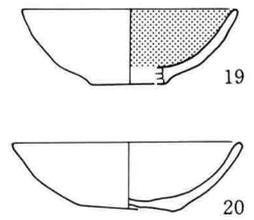


Ⅲ-19 2号溝址土器出土状態

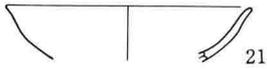
1号住居址(1~18)



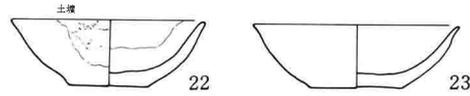
2号住居址(19·20)



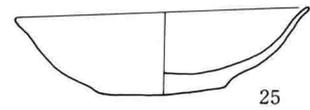
性格不明遺構 1



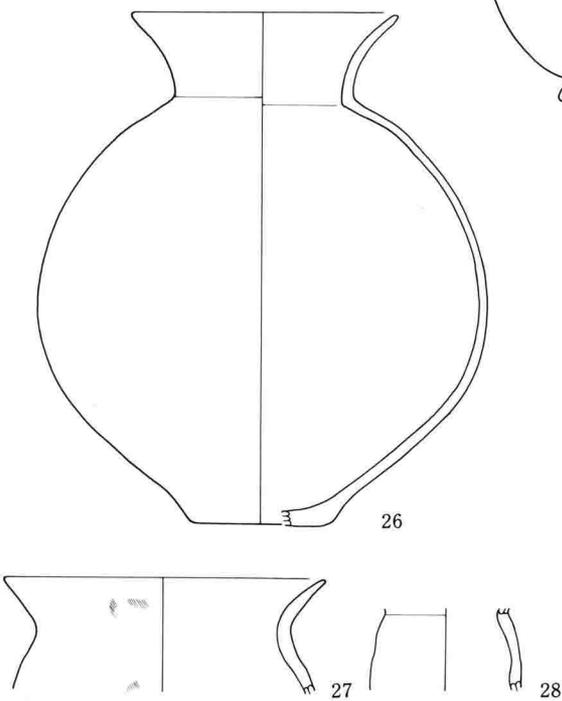
性格不明遺構 2 (22~24)



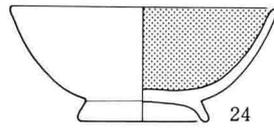
6号土坑



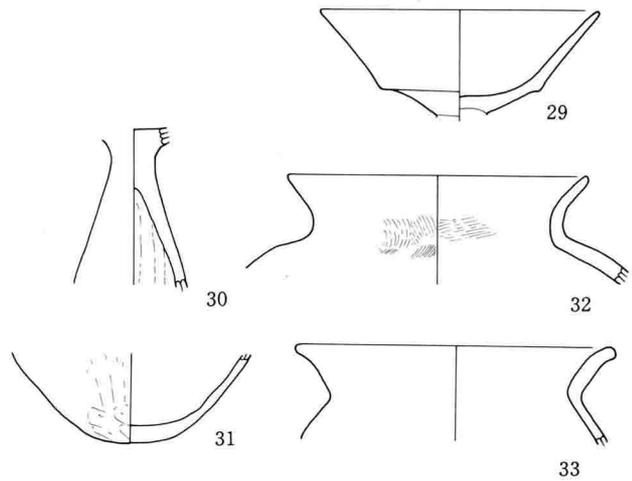
1号溝址(26~28)



性格不明遺構 2 (22~24)

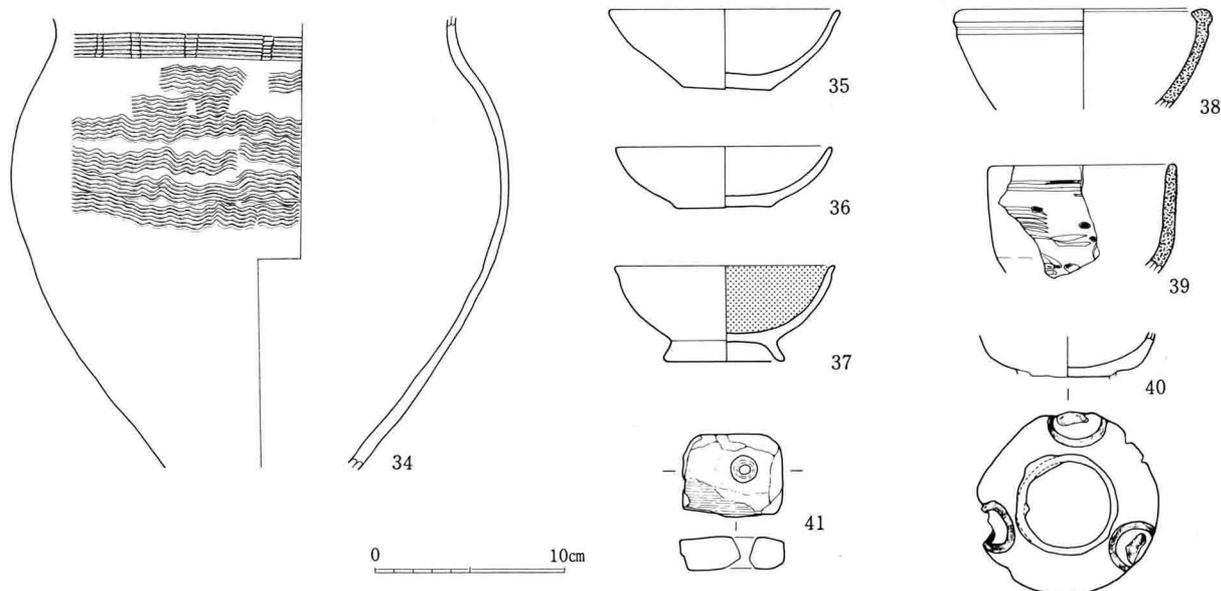


2号溝址(29~33)



0 10cm

16图 遺構出土土器実測図(1:4)



17図 検出面出土遺物実測図(1:4)

5 遺物観察表

図番号	番号	種別	器種	法量 (cm)			遺存	成形・調整等	備考
				口径	底径	器高			
1号住居址(2次面)									
15	1	土師	坏	12.5	4.6	3.8	1/2	ロクロ, ナデ, 糸切り	貯蔵穴
	2	〃	〃	11.4	4.0	3.4	3/4	〃, 〃, 〃	
	3	〃	〃	11.4			1/4	〃, 〃	貯蔵穴
	4	〃	〃	10.2	5.0	3.2	1/4	〃, 〃, 糸切り	
	5	〃	〃		3.8		ママ	〃, 〃, 〃	貯蔵穴
	6	〃	〃	11.8			1/6	〃, 〃	
	7	黒色	椀	14.1			1/4	〃, ヘラミガキ・黒色	
	8	土師	〃	13.8			1/2	〃, ナデ, ナデ	貯蔵穴
	9	黒色	〃	14.2	6.6	6.5	1/4	〃, ヘラミガキ・黒色, ナデ, 底ママ	〃
	10	〃	〃	14.6	6.5	6.2	1/2	〃, 〃・〃, 〃, 〃	〃
	11	〃	〃	14.3	6.8	6.2	完	〃, 〃・〃, 〃	〃
	12	〃	〃		8.2		1/2	〃, 〃・〃・放射状暗文, ナデ	
	13	〃	〃	13.8			2/3	〃, 〃・〃, ナデ	貯蔵穴
	14	〃	〃		7.6		ママ	〃, 〃・〃, 〃	
	15	灰釉	〃	14.7	7.3	5.1	1/3	〃, 糸切り, 漬け掛け, 胎土白灰色	
	16	土師	鉢	8.5	5.3	9.0		〃, ナデ, ヘラナデ	貯蔵穴
	17	〃	〃	16.6			1/6	ナデ, ナデ	〃
	18	〃	甕	17.0			1/8	ロクロ, ナデ	
2号住居址(2次面)									
15	19	黒色	坏	11.3	4.0	4.0	1/4	ロクロ, ヘラミガキ・黒	
	20	土師	〃	12.1	5.0	2.5	1/2	〃, ナデ, 糸切り	
性格不明遺構1(2次面)									
15	21	土師	坏	13.1			1/4	ロクロ, ナデ, 赤褐色	

図 番 号	番 号	種 別	器 種	法 量 (cm)			遺 存	成 形 ・ 調 整 等	備 考
				口 径	底 径	器 高			
性格不明遺構2 (2次面)									
15	22	土師	坏	10.2	4.2	3.5	完	ロクロ・ヘラナデ, ナデ, 糸切り, 油煙痕	灯明皿
	23	ク	ク	10.8	4.8	3.2	1/3	ク・ク, ク, ク, 底ママ	
	24	黒色	椀	14.0	6.6	6.0	1/8	ク, ヘラミガキ・黒, 糸切り, 底ママ	
6号土坑 (1次面)									
15	25	土師	坏	15.5	6.6	4.4	完	ロクロ, ナデ, 糸切り	混入品?
1号溝址 (3次面)									
15	26	土師	壺	14.1	7.3	27.0	1/2	器面アレ, ヘラミガキ, ヘラナデ	
	27	ク	甕	17.0			1/10	ハケナデ・ナデ, ナデ・ヘラナデ	
	28	ク	ク				1/2	ナデ, ナデ	
2号溝址 (3次面)									
15	29	土師	高坏	14.6			1/4	ヘラミガキ, ヘラミガキ	
	30	ク	ク				ママ	器面アレ, 絞り痕	
	31	ク	甕		丸底		ママ	ヘラケズリ, ナデ	
	32	ク	ク	15.7			1/4	ハケナデ・ヘラナデ・ナデ, ハケナデ・ヘラナデ	
	33	ク	ク	15.5			1/6	ヘラナデ・ナデ, ハケナデ・ナデ	
3次検出面									
16	34	弥生	甕				ママ	2連止簾状文・波状文上→下・ヘラミガキ, ナデ	
2次検出面									
16	35	土師	坏	12.2	4.5	4.2	完	ロクロ, ナデ, 糸切り	
	36	ク	ク	10.3	5.0	3.2	1/4	ク, ク, ク, 底ママ	
	37	黒色	椀	11.6	6.2	5.0	2/3	ク, アレ・黒色, ナデ	
1次検出面									
16	38	灰釉	鉢	13.0			1/10	淡黄褐色, 胎土白褐色・軟質	瀬戸美濃?
	39	染付	碗	10.0			1/8		ク
	40	漆器	椀				ママ	黒漆地・赤漆重円紋	堀跡?

IV ま と め

中世の城館跡を想定して調査を実施したところであるが、予想に反して今回の調査地からはそれを積極的に実証する遺構・遺物の検出はなかった。堀跡とした大溝にしても北に行くに従い幅を縮小するなど堀としての規格性がなく、遺物も内耳土器片が数点出土しているのみで堀の機能的問題を残す。ただし、最下層の堆積土からは水を湛えていたことをうかがわせている点注意する必要がある。2次面の2号掘立柱建物址は1次面の柵址の在り方と近似していることから中世遺構と考えてよい。これらを踏まえて調査地の中世遺構を整理すると東側に堀があり、内側にあたる西側の屋敷内には時期を替えた稲穂等を干したであろうか柵が設置されたり、2号掘立柱建物址のような簡易な納屋または作業小屋が存在した空間と考えられる。

2次面では平安時代中期の住居址や掘立柱建物址が確認されているが、遺物からも一時期に限定される小集落の存在が予想される。

3次面では居住施設は存在しなく、古墳時代前期の溝址が確認されているにすぎない。土器の出土状態は溝の底面に集中した状況での検出であったので祭祀に関与する遺物の可能性がある。さすれば周辺に集落の形成はみられないかもしれない。弥生時代後期の箱清水式期の甕が1個体出土している。これも流入したものか近隣に居住遺跡が存在することを意味するのか不明である。



1



9



10



11



13



23



16



20



15



34



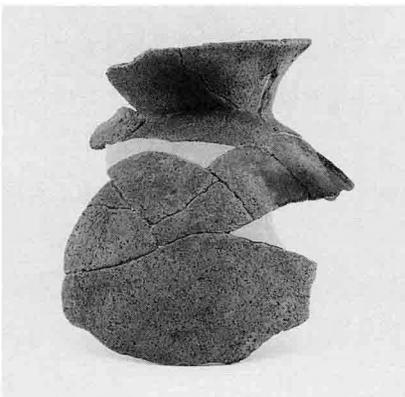
35



25



40



26

小島柳原遺跡群 中俣遺跡Ⅲ

— (株)永楽開発長野支店事務所建設地点 —

例 言

- 1 調査地は、長野市柳原字下返町2551-10に所在する。
- 2 発掘調査は、平成7年9月11日から10月11日にかけて実施し、約300m²を調査した。
- 3 遺跡名末字のⅢは、過去において中俣土地区画整理事業地点（Ⅰ）、消防局柳原分署建設地点（Ⅱ）での調査歴によるものである。
- 4 遺跡の略号は「KYNE」である。

目 次

I 調査の経過	1	
1 調査の事務経過	1	
2 調査日誌抄	1	
3 調査の体制	2	
II 調査地周辺の環境	3	
1 地理的環境	3	
2 考古学的環境	4	
III 調査	8	
1 試掘調査	8	
2 弥生時代中期（栗林式期）の遺構と遺物	9	
(1) 住居址 9	(2) 土坑 12	(3) 検出面の遺物 14
3 弥生時代後期（箱清水式期）の遺構と遺物	14	
(1) 住居址 14	(2) 土坑 18	
4 古墳時代前期の遺構と遺物	18	
(1) 方形周溝墓 18		
5 時期不明の遺構	19	
6 遺物観察表	20	
IV まとめ	21	

挿 図 目 次

1 図	小島柳原遺跡群範囲推定図	5
2 図	調査地と地形図	6
3 図	基本土層柱状図(A地点)	8
4 図	遺構分布図	8
5 図	2号住居址実測図	9
6 図	3号住居址実測図	9
7 図	2号(1・2)・3号(3)・4号(4)住居址出土土器実測図	10
8 図	4号住居址実測図	11
9 図	5号住居址実測図	11
10 図	土坑実測図	12
11 図	遺構出土土器拓影	13
12 図	土製品・石器実測図	14
13 図	1号住居址実測図	15
14 図	1号住居址出土遺物実測図	16
15 図	6号住居址実測図	16
16 図	6号住居址出土土器実測図	17
17 図	5号土坑出土土器実測図	18
18 図	方形周溝墓実測図	19
19 図	方形周溝墓出土土器実測図	19

I 調査の経過

1 調査の事務経過

平成6年5月19日 事業主体者からの開発行為に関する事前協議申出書に基づき試掘調査を実施する。遺跡の存在を確認する。

12月12日 調査対象地等について保護協議を行う。

平成7年8月24日付 文化財保護法57条の2第1項の規定に基づく「埋蔵文化財発掘の届出について」の書類の提出があり、発掘調査が必要の旨を付記して25日付長野県教育委員会教育長宛進達する。

8月10日付 法98条の2第1項の規定に基づく「埋蔵文化財発掘調査の通知について」を提出する。

9月8日付 (株)永楽開発代表取締役社長進藤武二と長野市長塚田 佐とで「埋蔵文化財発掘調査委託契約書」を締結する。

9月6日付 県教委教育長より「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について（通知）」がある。

9月11日～10月11日 発掘調査を実施する。

10月11日付 事業主体者・県教委教育長宛「発掘調査終了届（通知）」を、長野中央警察署長宛「埋蔵文化財の拾得について（届）」・「埋蔵文化財保管証」を提出する。

11月15日付 県教委教育長より「埋蔵物の文化財認定について（通知）」がある。

平成8年3月31日付 『浅川扇状地遺跡群駒沢城跡・小島柳原遺跡群中俣遺跡Ⅲ』を刊行する。



I-1 湧水による冠水



I-2 遺構検出作業

2 調査日誌抄

9月11日～18日（4日）重機による表土除去作業。

9月13日 調査機器材搬入。草刈り等環境整備作業。

9月19日 遺構検出作業。

9月20日～28日 溝状遺構（方形周溝墓）の追求・露呈作業。

9月22日～10月6日 SA1の検出と遺構追求。

10月3日 SA3～5調査開始。～4日SA4、～5日SA3・5完掘。

10月5日 SA2・SK1調査開始、～6日完掘。



I-3 遺構の露呈

10月6日～9日 SA6調査。

10月9日 個々の遺構および全体遺構写真撮影。

10月9日・11日 遺構測量。発掘調査終了。

3 調査の体制

埋蔵文化財センターの組織体制については駒沢城跡の項を参照にされたい。この節では直接発掘調査・整理調査を担当した職員および従事者を記する。

調査主体者 長野市教育委員会教育長 滝澤忠男

総括責任者 埋蔵文化財センター所長 丸田修三

調査担当者 所長補佐兼調査係長 矢口忠良（報告書編集）

調査係 主事 千野 浩（弥生時代土器実測）

主事 飯島哲也（主任調査員、保護協議、試掘調査・遺構写真、）

主事 風間栄一（遺物写真）

専門員 小野由美子（調査員）

発掘調査作業員 岩崎寛治郎・岩崎利子・卯之原光子・唐木田富士子・北村宣之・神頭幸雄・小林紀代実・小林三郎・鈴木友江・中村忠彦・原山嘉三郎・美谷島昇・村橋寿美男・大和笑子

整理作業員 池田見紀・岡沢治子・小泉ひろ美・塚田容子・徳成奈於子・西尾千枝・向山純子・武藤信子

遺構測量委託 (有)写真測図研究所代表取締役 杉本幸治

重機等賃貸借契約者 北信土建(株)代表取締役 野澤柳一郎

(株)永楽開発担当者 長野支店次長不動産第一課長 福島 香

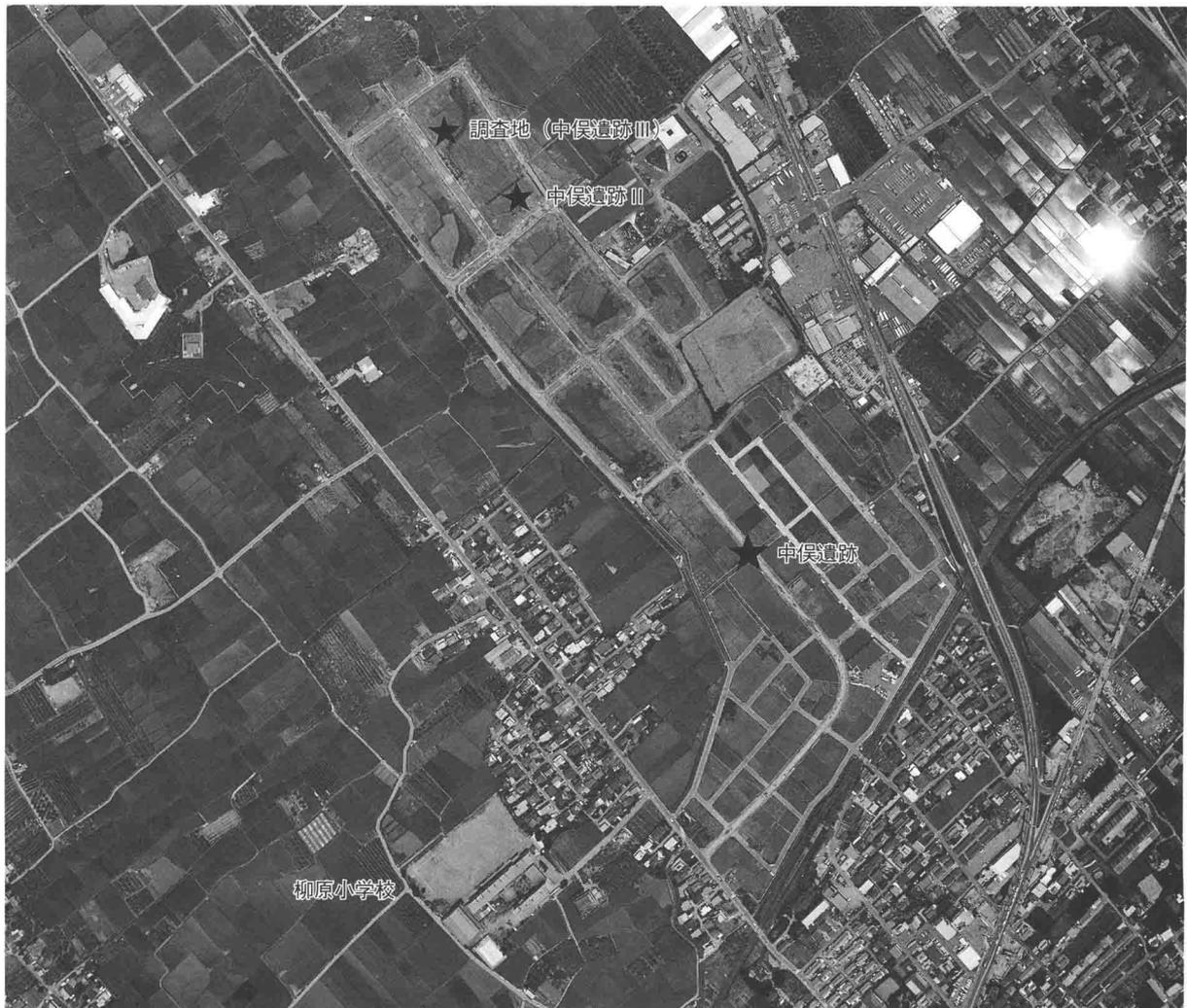


I-4 方形周溝墓周縁に並ぶ発掘調査従事者

Ⅱ 調査地周辺の環境

1 地理的環境

遺跡は長野市域の北東端に位置し、犀川・裾花川・浅川を主とする堆積物の押し出しにより形成された複合扇状地状沖積地の端部にあたり、現在東方約1kmを流れる千曲川がそれを自然堤防化したところにある。詳細地形をみると自然堤防上ではあるが、一見平坦と観察されるものの高低差に於いて微妙に変化している。前記した河川の面影をとどめている大きな緩い窪地を利用した現水田面は後背湿地と推定され、古代に於いても良好な水稻栽培の生産地として重要な位置を占めていたものと思われる。また、微高地には古い集落が形成されており、その地形利用の同一性をおもわせる。ただし、2図の地目をみれば昭和31年頃には長野電鉄線より北側一帯は水田が展開しており、果樹園や畑等の高地を推定される地目の表示はみられない。この図では標高336mから334mに位置し、南北約750m間に2m程の高低差が認められる。東西方向では平坦になり、裾花川等の堆積土の状況を表している。北東方向に標高線が幾分突出しており微高地方向を示しているものと思われる。それ故に遺跡範囲の確定には難しいものがある。



Ⅱ-1 調査地周辺の航空写真 (平成2年、(株)ジャステック)

2 考古学的環境

小島柳原遺跡群は千曲川左岸の自然堤防上に展開することは間違いのないところであるが、前節で記述したとおり千曲川に面する南側の範囲確定以外不明瞭な点が多い。一応今までの調査暦から南北方向約3km、直交方向最大幅1.1kmの扁平な隅丸三角形を呈する範囲を遺跡群の主体範囲と推定する（1図）。標高は337mから334mの範囲に展開し、大字名で北長池・小島・中俣地籍にあたる。柳原小学校建設地点の発掘調査以前は小島遺跡・中俣遺跡・村山橋西詰遺跡・平蔵屋敷遺跡・布野裏遺跡・中堰遺跡等が周知されており、いずれの遺跡も長野電鉄線以南の集落微高地であった。柳原小学校建設地点の発掘調査以後周辺の住宅化等の開発が進み、新たな地点遺跡が確認されるようになり、各時代・時期の中核的な遺跡と認識されるようになった。以下発掘調査暦のある遺跡を遺跡分布図（1図）記載の番号順に略記する。

2 中俣遺跡Ⅱ（中央消防署柳原分署建設地点）

柳原分署移転新築事業に伴い平成3年度に約400m²を発掘調査した。調査地点は区画整理事業地の北側に位置し、遺跡としても北端の遺構と推定される。調査では時期が特定される弥生時代後期の住居址3軒、古墳時代後期の住居址1軒を検出した。古墳時代後期の遺構は区画整理調査地点からは確認されておらず水内坐一元神社遺跡とは別な集落が形成されていた可能性がある。

（長野市教委1992『小島柳原遺跡群中俣遺跡Ⅱ』長野市の埋蔵文化財第48集）

3 中俣遺跡（中俣土地区画整理事業地点）

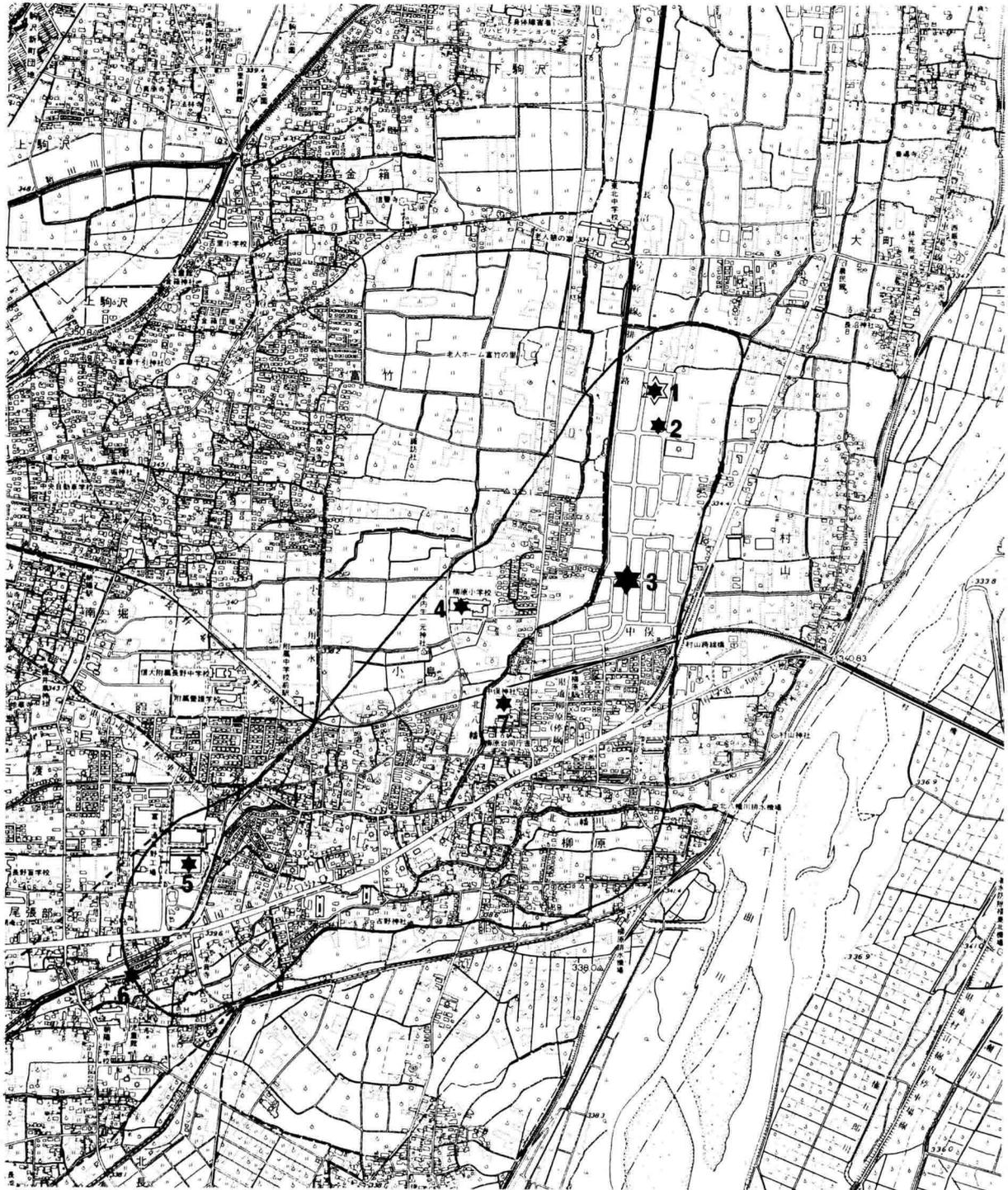
昭和63年度～平成2年度にかけて約5000m²を発掘調査した。想定される中俣遺跡範囲の中央部分に位置する。調査では弥生時代中期から古墳時代前期にかけての遺構を検出した。なかでも中期後半の栗林式期の集落は規模が大きく住居址19軒・土坑19基・溝址2条が確認されている。ほぼ同時期に展開したと思われる千曲川下流の中野市栗林遺跡、上流の松代町松原遺跡等の大規模集落の存在を考慮するならば、千曲川の河川交通を中心に形成された戦略的ネットワークに組み込まれた一つの拠点集落として位置付けられる。また、弥生時代終末から古墳時代初頭に機能していたと思われる大型溝址から大量の外来系土器群が発見された。北陸地方を中心に東海や近江地方の影響を示す土器群である。さらに遺構外からであるが近畿地方の布留式土器も出土している。これらは古墳出現前夜における活発な人々の交流をものがたるものであり、北信地域における古墳出現期の様相を追求する上できわめて重要な資料である。

（長野市教委1991『小島柳原遺跡群中俣遺跡 浅川扇状地遺跡群押鐘遺跡・檀田遺跡』長野市の埋蔵文化財第41集）

4 水内坐一元神社遺跡（柳原小学校建設地点）

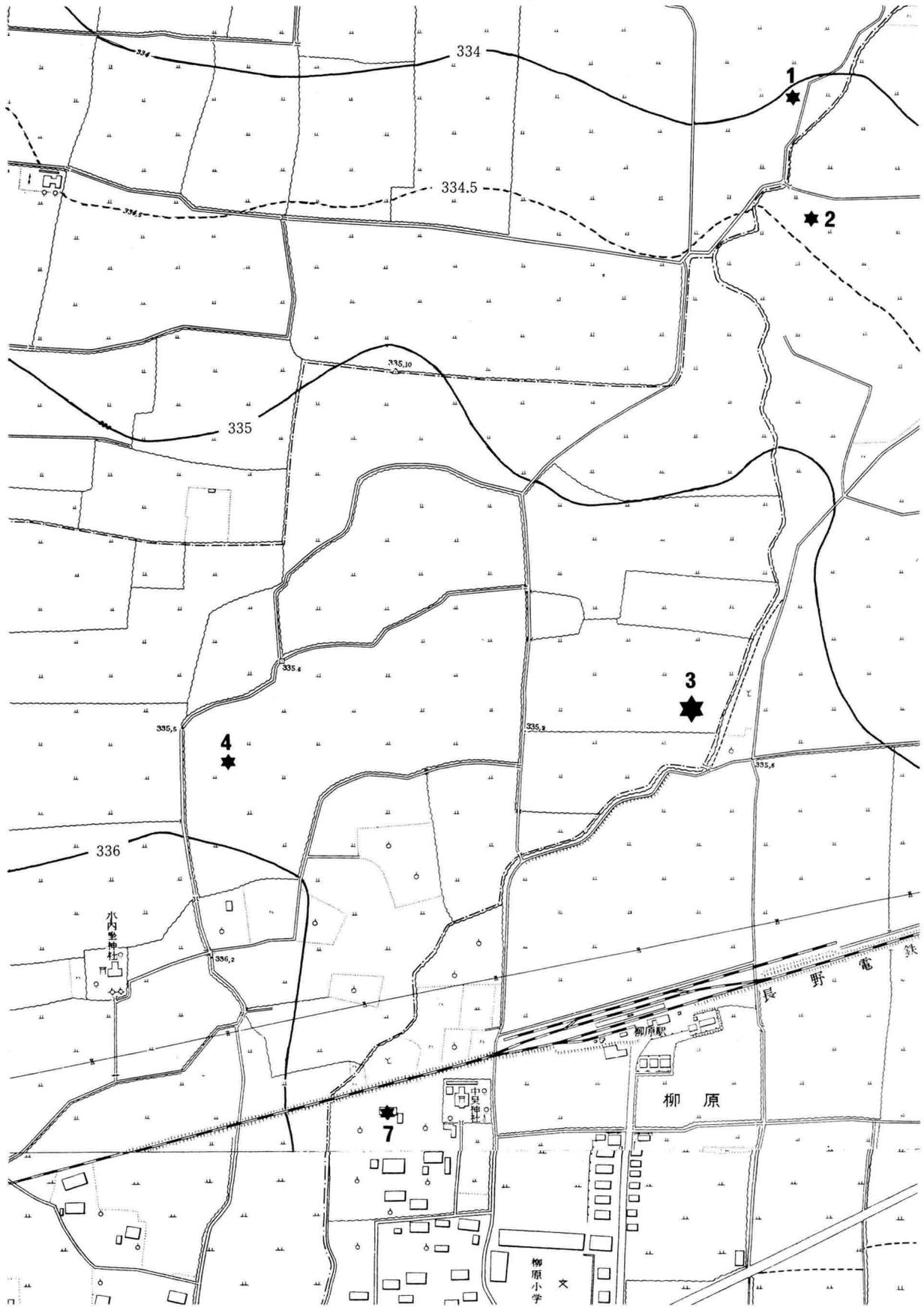
柳原小学校移転新築事業に伴い昭和54年度に発掘調査された遺跡で、中俣遺跡と同一の自然堤防に立地する。将来的には当遺跡の範疇として把握される可能性が高い。弥生時代中期住居址4軒・古墳時代後期住居址5軒・平安時代柱穴群等が検出されている。弥生時代中期から古墳時代前期を中心とする中俣遺跡とは構造・時期的にややずれがあり、各時期の集落立地の変遷を考える上で重要と思われる。

（長野市教委1980『三輪遺跡―〔付〕水内坐一元神社遺跡』長野市の埋蔵文化財第6集）



- 1 中俣遺跡Ⅲ (株永楽開発事務所建設地点) 2 中俣遺跡Ⅱ (中央消防署柳原分署建設地点)
 3 中俣遺跡Ⅰ (中俣土地区画整理事業地点) 4 水内坐一元神社遺跡 (柳原小学校建設地点)
 5 小島境遺跡 6 南川向遺跡 7 宮西遺跡

1 図 小島柳原遺跡群範囲推定図 (1 : 20,000)



2図 調査地と地形図（1：5,000 昭和31年測図）

5 小島境遺跡

昭和57・58年度に特殊宅地造成事業（富士通長野工場新築）に伴い発掘調査が実施され、弥生時代中期以降各時代の遺構が確認されている。古墳時代前期の周溝墓5基と住居址群が検出され、住居址群のうち3軒から玉造生産関係の遺物が出土している。出土土器群の様相には新潟地方の影響が色濃くみられ、またS字状口縁台付甕もこれに伴出しており、千曲川流域における古墳時代初頭の土器様相を示す良好な資料といえる。

（青木和明1984「小島境遺跡」『古墳出現期の地域性』千曲川水系古代文化研究所他）

6 南川向遺跡

昭和61年度に宅地開発事業を起因とする発掘調査を実施し、平安時代を主体とする集落跡を確認した。遺構は古墳時代前期土坑1基、平安時代後期の住居址6軒・土坑13基・溝址5条、中世の特殊遺構1基等がある。特記遺物に緑釉陶器皿が出土している。

（長野市教委1988『小島柳原遺跡群南川向遺跡』長野市の埋蔵文化財第25集）

7 宮西遺跡

平成5年度に中俣住宅造成事業に伴い発掘調査を実施した。弥生時代住居址11軒、古墳時代周溝墓2基、中世溝址等が検出されている。弥生時代住居址は中期後半と後期後半の2時期のもので、その在り方から水内坐一元神社遺跡の範疇に含まれる可能性がある。周溝墓は前方後方形または方形と推定される。

（長野市教委1994『小島柳原遺跡群宮西遺跡』長野市の埋蔵文化財第64集）



II-2 調査地近景

Ⅲ 調 査

1 試掘調査

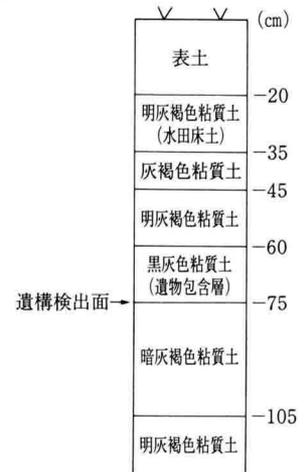
調査日 平成6年5月19日

調査の目的 開発事業予定地は「周知の埋蔵文化財包蔵地」の範囲内であり、埋蔵文化財の包蔵状況によって破壊のおよぶ可能性も考えられる。したがって施工に先立ち事業予定地内を試掘し、埋蔵文化財の包蔵状況を調査する。

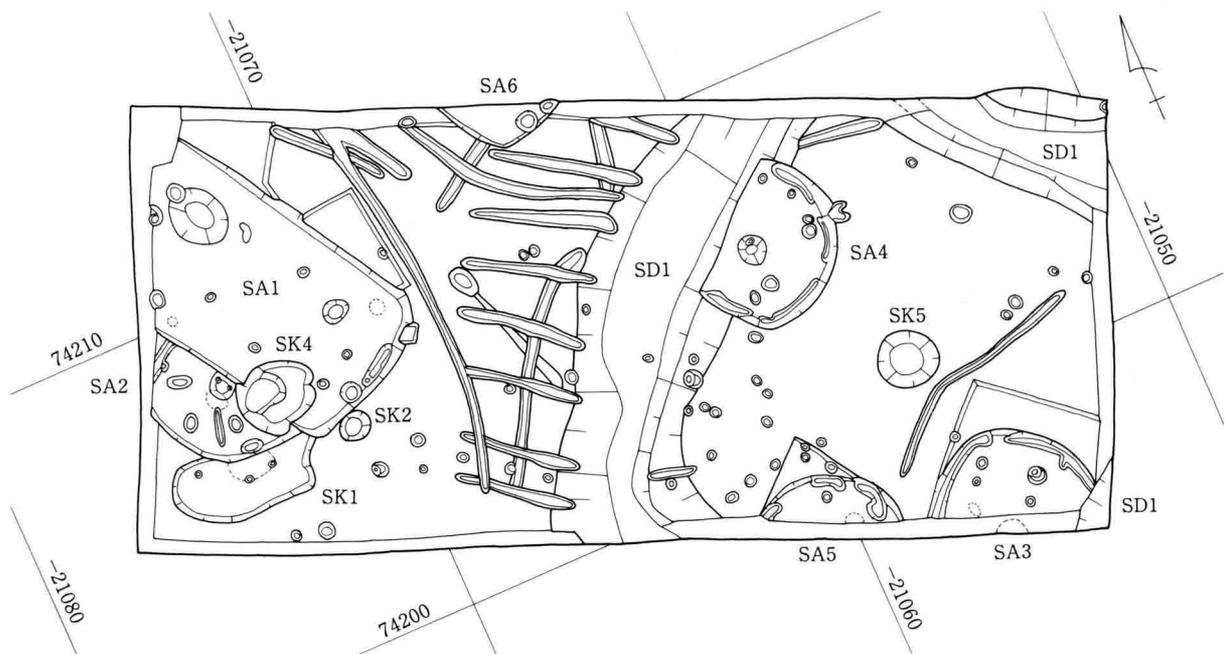
調査の方法 事業予定地内で埋蔵文化財包蔵の可能性が考えられる任意の地点に試掘坑（トレンチ、L 2 m×W 2 m）を2箇所設定し、重機により掘削し、坑内断面の土層観察により遺物包含層の有無及び深さを確認する。

調査の結果 A・B試掘坑にて確認された堆積土壌は基本的に7層に分層される（3図）。第1層は表土層で水田耕作土、第2層は明灰褐色粘質土層で水田床土である。第3層までは粘土層、第4層から粘質土層に変質している。地表下約60cmにて第5層の黒灰色粘質土層の遺物包含層を検出した。包含層からは弥生時代の所産と思われる土器片が多量に出土した。厚さ15cmの包含層の下層が暗灰褐色粘質土層の遺構検出面になる。B試掘坑にて柱穴と考えられる土坑1基を確認した。これより下層は明灰褐色強粘質土層となり、無遺物層となる。

以上の所見により遺物包含層まで地表から約60cm、遺構検出面までの深さが約75cmであることから、開発事業による埋蔵文化財に与える影響が懸念される。したがって開発事業着手前に埋蔵文化財保護措置が必要と思料される。



3図 基本土層柱状図 (A地点)



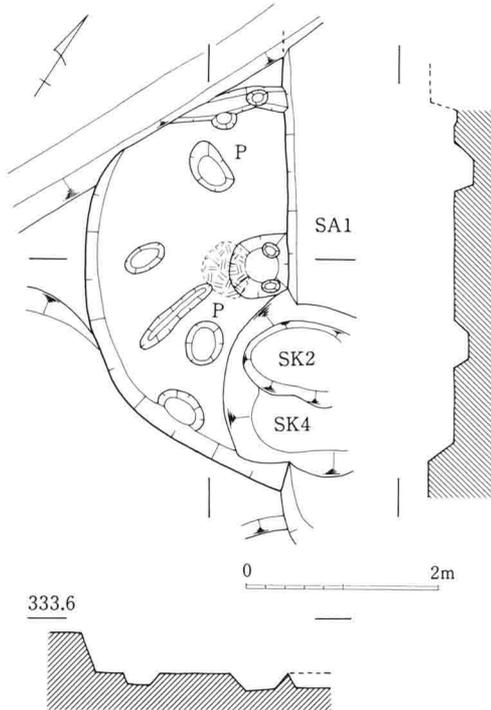
4図 遺構分布図 (1:200)

2 弥生時代中期（栗林式期）の遺構と遺物

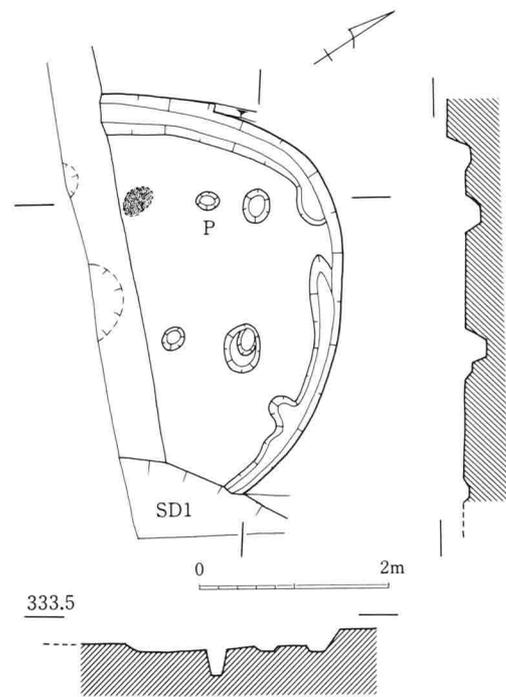
(1) 住居址

2号住居址（5図） 調査地の南端に位置し、北側半分程を後期の1号住居址に掘り込まれ破壊をうける。また、1号・2号・4号土坑とも重複しあい、1号よりも新しく、2号・4号よりも古いという前後関係にある。検出した部分は南側半分にすぎず、形態が円形を呈するであろうと推定される。南北の規模は4.3m前後で、西壁の掘り込みの深さは30cmを測る。支柱穴と推定される小穴は南北方向に2個が推定され、その中間付近に炭化物の堆積と深さ18cmの小穴がある。明確な焼土の確認はなかったが、炉の存在が予想される。支柱穴の位置が正しければ主軸の方向はN124°Wを指す。床面は平坦で軟弱である。

遺物 出土量は少なく、全て破片である。器種には細口壺（7図1）・甕（2）がある。細口壺は筒形を呈し、折り返し口縁で肥厚する。口縁部と口唇部にはLRの縄文を施し、口縁部には一對4個の帯状縦位の貼付文が付



5図 2号住居址実測図（1：80）



6図 3号住居址実測図（1：80）



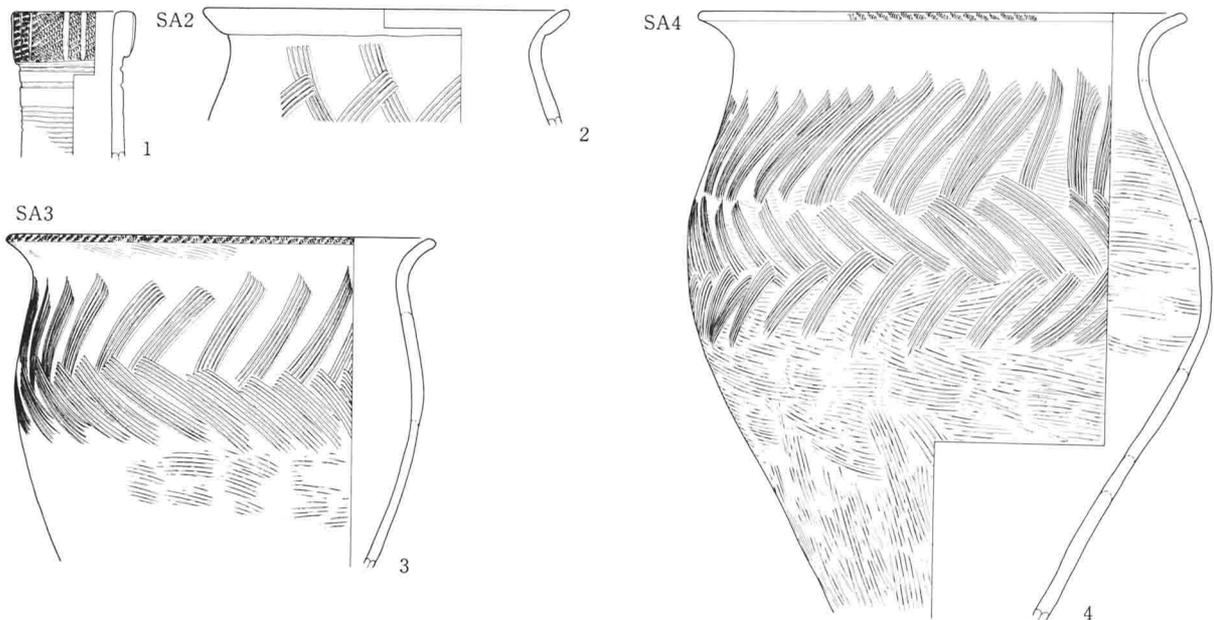
Ⅲ-1 2号住居址

される。口縁部下には2条の沈線文を、頸部中位には平行沈線文を巡らす。甕の口縁部も有段をなし、体部には右回りに櫛描羽状文を施す。この他に頁岩製打製石鏃(12図5)が出土している。

3号住居址(6図) 調査地の北東隅部に位置し、遺構の東側半分以上が調査区域外に延びている。住居址の北東部は方形周溝墓により切り取られている。形態は円形を呈し、4.5m程の規模になるものと思われる。炉は西壁寄りに認められ、僅かなくほみに焼土が残存していた。炉の位置から北の小穴が主柱穴と推定されるが、配列は不明である。掘り込みは20cm前後で、不連続の幅10~25cm・床面からの深さ6cm程の周溝が壁下を巡る。床面は平坦かつ堅緻である。

遺物 図示できるものは床面から出土した甕(7図3)が1個体あるにすぎない。この他に破片として壺(11図5)・甕(6・7)の拓影を掲載した。甕の文様は口唇部にLR縄文を、頸部から体部中位にかけ櫛描斜行線文上から下に描き羽状文とする。外面調整は頸部がハケナデ・ナデ、体部下半がヨコハケナデのちヘラミガキが施される。内面は全体に丁寧なヘラミガキ調整である。拓影図5の壺体部には篋描横線文・沈線区画文・円形浮文が描かれ、6の甕肩部には櫛描刺突文が巡らされる。この他に土器片利用の有孔円板(12図1)の未製品がある。

4号住居址(8図) 調査地の中央付近に位置するも、西側半分は方形周溝墓により破壊をうける。形態は円形



7図 2号(1・2)・3号(3)・4号(4)住居址出土土器実測図(1:4)

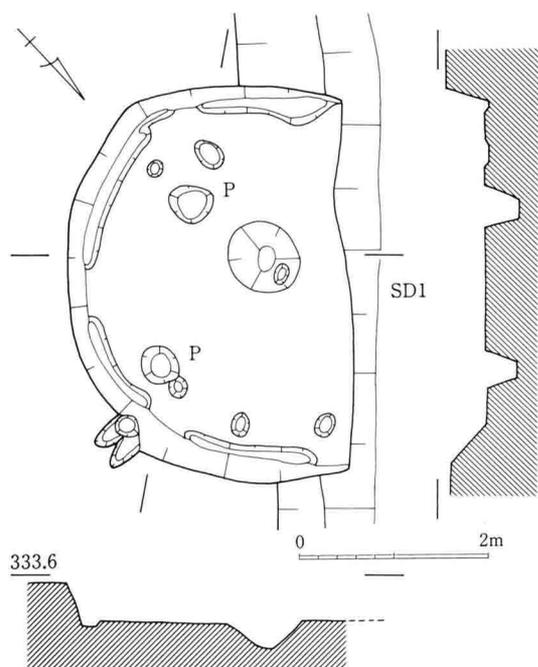


Ⅲ-2 3号住居址

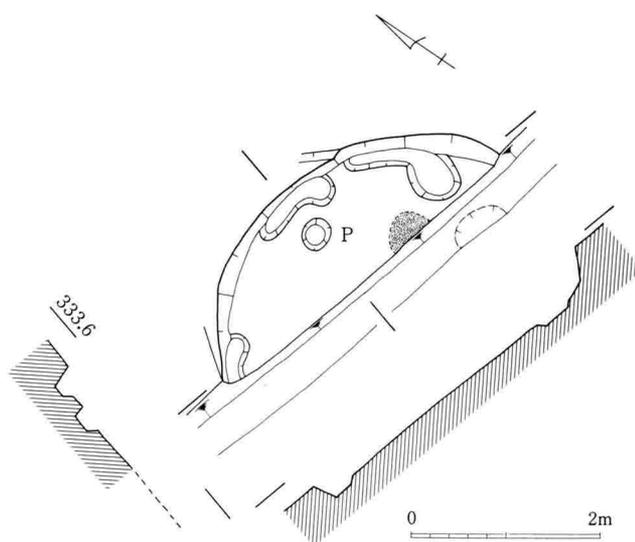
を呈し、南北の差し渡し4.2mの規模になる。掘り込みは比較的深く東壁で42cmを測り、床面は平坦かつ堅緻である。壁下には不連続で断片的な周溝が巡る。支柱穴に東壁寄りの2個の小穴を抽出するが、配列は不明である。露呈部内に焼土は確認できず、炉は西壁側の支柱穴間に存在したものと予想する。

遺物 床面から潰れた状態ではほぼ完形の甕（7図4）が1個体出土している他は、11図の拓影の壺（8～12）・甕（13～17）の破片があるにすぎない。甕の文様は口唇部にRL縄文を配し、頸部から体部中位の最大径部まで上から下に櫛描斜行線文を交互に3段施し羽状文とする。外面の調整は口縁部・頸部がハケナデのちナデを加え、体部は全体にヘラミガキが施される。内面はハケナデのちヘラミガキ調整で仕上げる。この他に甕の体部破片を用いた有孔円板の未製品（11図2・3）が出土している。

5号住居址（9図） 調査地の東寄りに位置し、東に3号住居址と隣接する。調査で露呈した部分は北壁側の一部にすぎず、大部分は調査区域外に延びる。形態は円形を呈し、円弧から差し渡し4.1m前後の規模になるものと思われる。掘り込みは東側で深く40cmを測る。壁下に断続する周溝を意識したものか不定型な落ち込みがみられ



8図 4号住居址実測図（1：80）



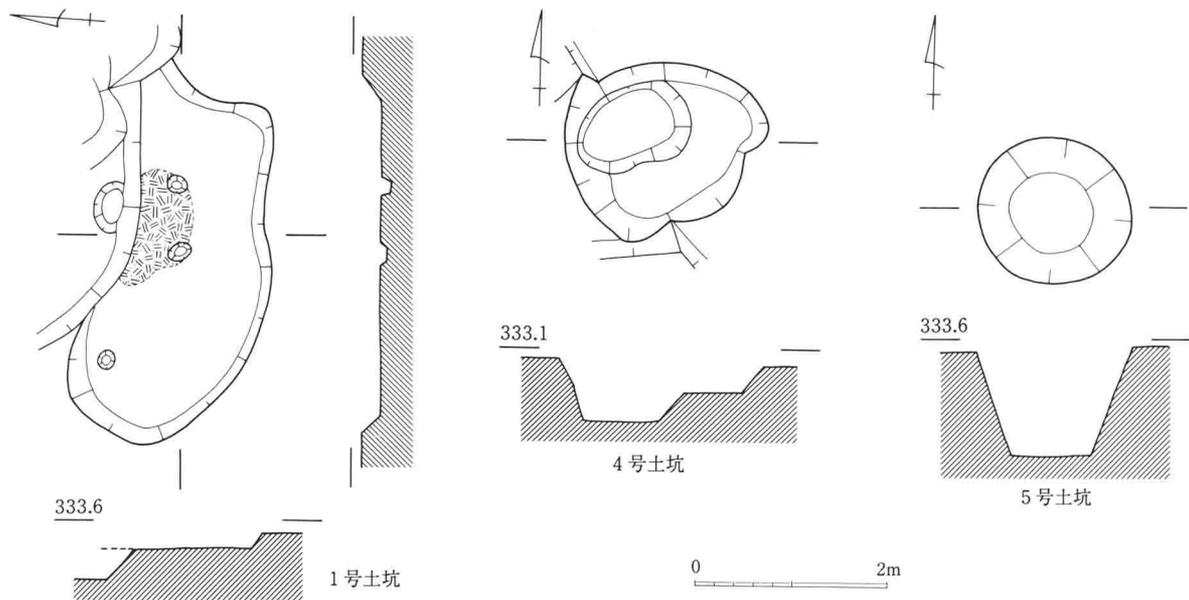
9図 5号住居址実測図（1：80）



Ⅲ-3 3号住居址



Ⅲ-4 5号住居址



10図 土坑実測図 (1:80)

る。床面は平坦で堅緻である。炉は住居址の北側に偏して設けられており、数cmの窪みに焼土が残存する。遺構内の小穴は支柱穴と考えられる。

遺物 出土量は少なく、全て破片である。器種には壺 (11図18) と甕 (19~21) がみられる。

(2) 土坑 (10図)

遺物が出土したもの、時期が判明している遺構を記載する。

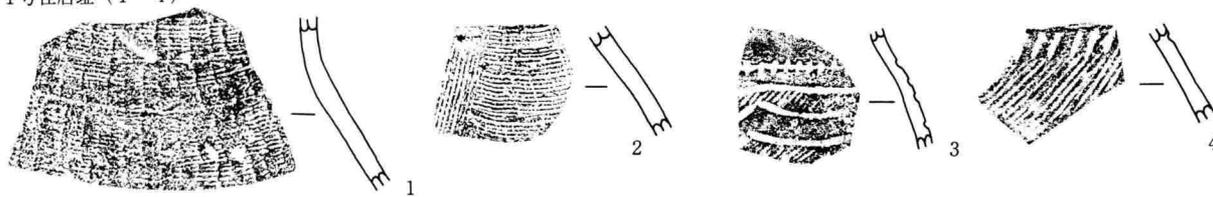
1号土坑 調査地の南端に位置し、1号住居址よりも古く、北側をこれにより切り取られる。形態は不整形な楕円状を呈し、東西3.75mの規模になる。掘り込みは20cm程で、底面は平坦で軟弱である。遺構の中央付近に小穴2個を伴う炭化物の集積が認められたが、明確な焼土は確認されない。性格は不明である。

遺物 栗林式土器の小破片が数点出土しているにすぎない。

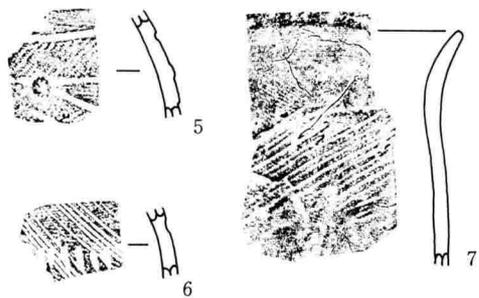
4号土坑 調査地の西端に位置し、1号・2号住居址と重複関係にある。1号より古く、2号より新しい遺構である。形態は不整形な楕円形状で、南北1.9m・東西2.1mの最大幅を測る。掘り込みは2段になり、長軸1.25mの楕円形土坑を内包する。深さは30cm、更に34cm掘り込まれる。底面は平坦で軟弱であり、焼土等は確認されない。性格は不明である。

遺物 出土量は少なく、全て小破片である。器種には壺 (11図22・23)・甕 (24~26) がある。

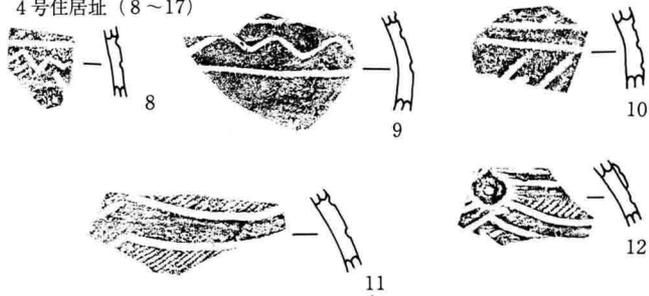
1号住居址 (1~4)



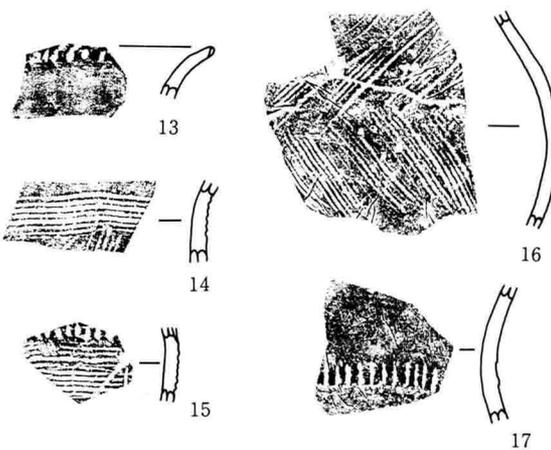
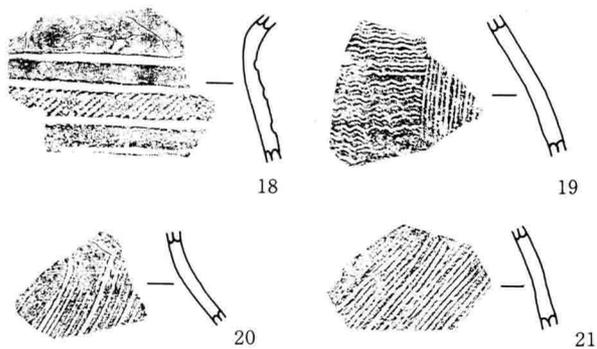
3号住居址 (5~7)



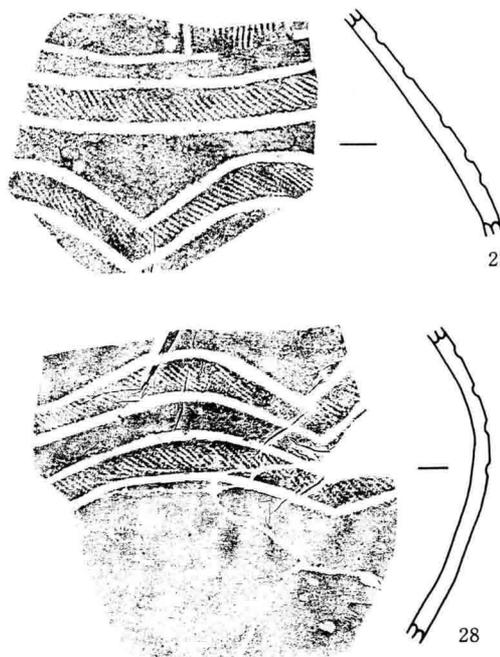
4号住居址 (8~17)



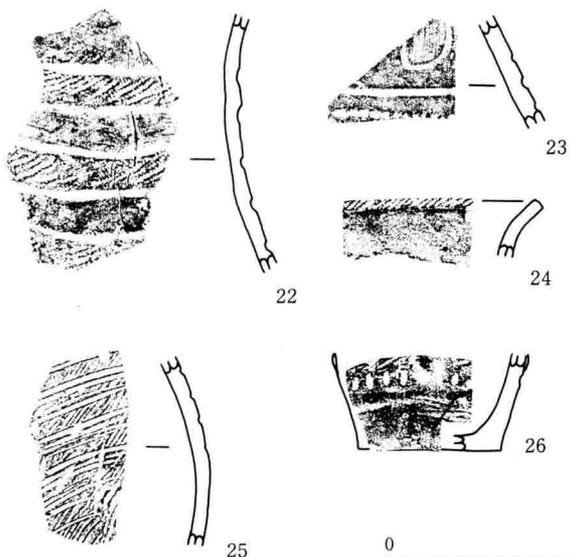
5号住居址 (18~21)



方形周溝墓 (27·28)



4号土坑 (22~26)

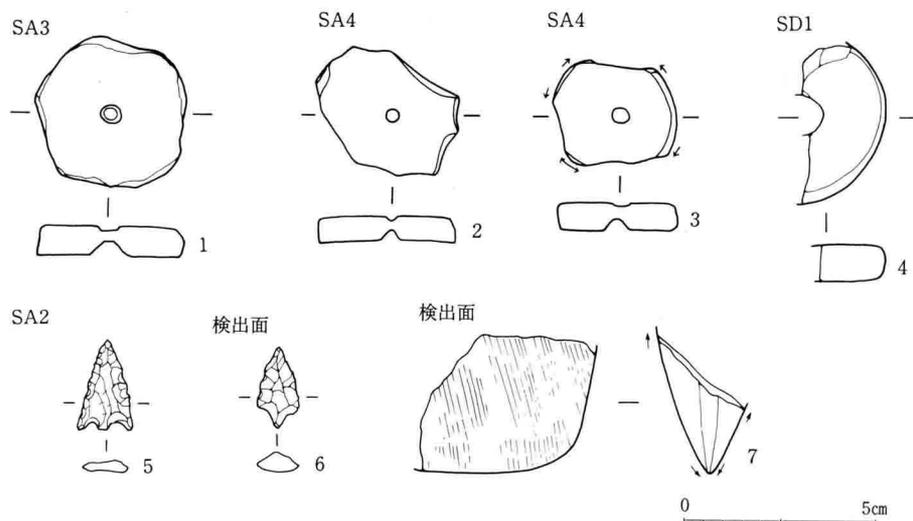


0 10cm

11图 遺構出土土器拓影图 (1:3)

(3) 検出面の遺物

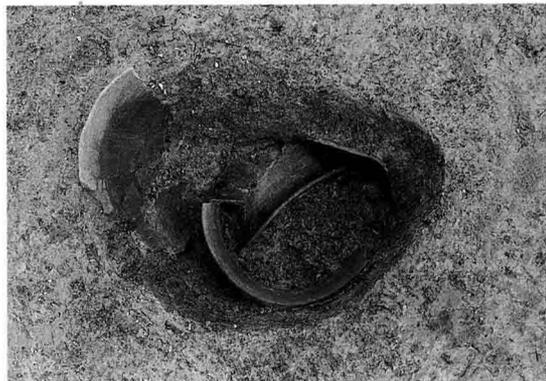
方形周溝墓検出中に栗林式期壺（11図27・28）の体部破片2点出土した。これらは同一個体で出土土器としては大形の破片で、おそらく方形周溝墓の盛土下に温存されていたものであろう。文様は体部上半に櫛描懸垂文とそれを取り巻く篋描刺突文で飾り、体部中位に2条の篋描沈線文・縄文を伴う重円弧文が施される。この他に頁岩製打製石鏃（12図6）・閃緑岩製太形蛤刃石斧（7）の刃部破片が出土している。



12図 土製品・石器実測図（1：2）



Ⅲ-5 1号(左)・4号(右)土坑



Ⅲ-6 5号土坑(後期)

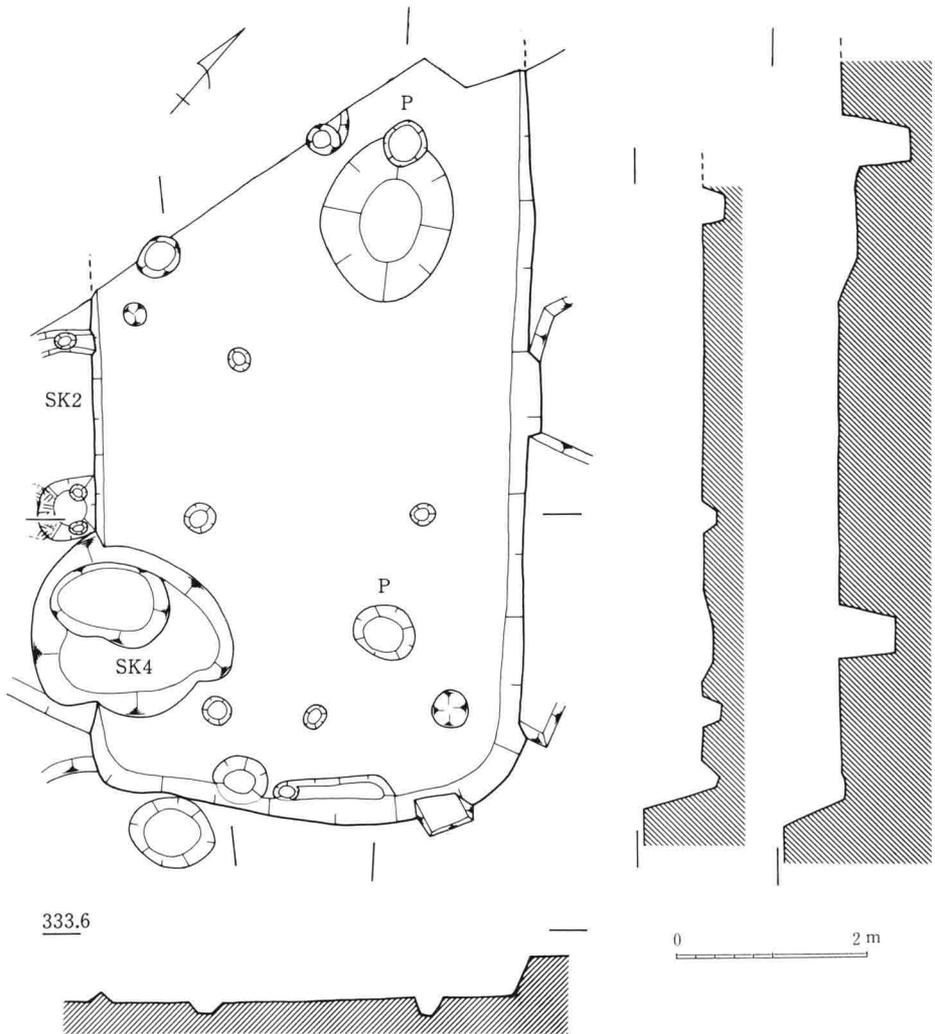
3 弥生時代後期（箱清水式期）の遺構と遺物

(1) 住居址

1号住居址（13図） 調査地の西端の遺構群の一つで、西壁の一部は調査区域外に延びる。形態は隅丸長方形を呈し、長軸の規模は8m超・東西4.7m規模になる。掘り込みは深く南壁で62cm測る。床面は北に幾分傾斜を有するものの平坦かつ堅緻である。支柱穴は東壁に添って2個確認され、西壁に添うものは4号土坑と調査区域外にあるものと予想し、長方形配列4本柱の小屋組を想定する。炉も南壁の支柱穴間に認められないことから北壁の調査区域外に設けられているものと予想する。北側に長軸1.7m・深さ20cmを測る土坑状落ち込みがみられるが、本住居址との関係は不明である。

遺物 住居址露呈規模の割には出土量が少なく、敲打台石（14図12）を除き全て破片出土である。壺（5）・

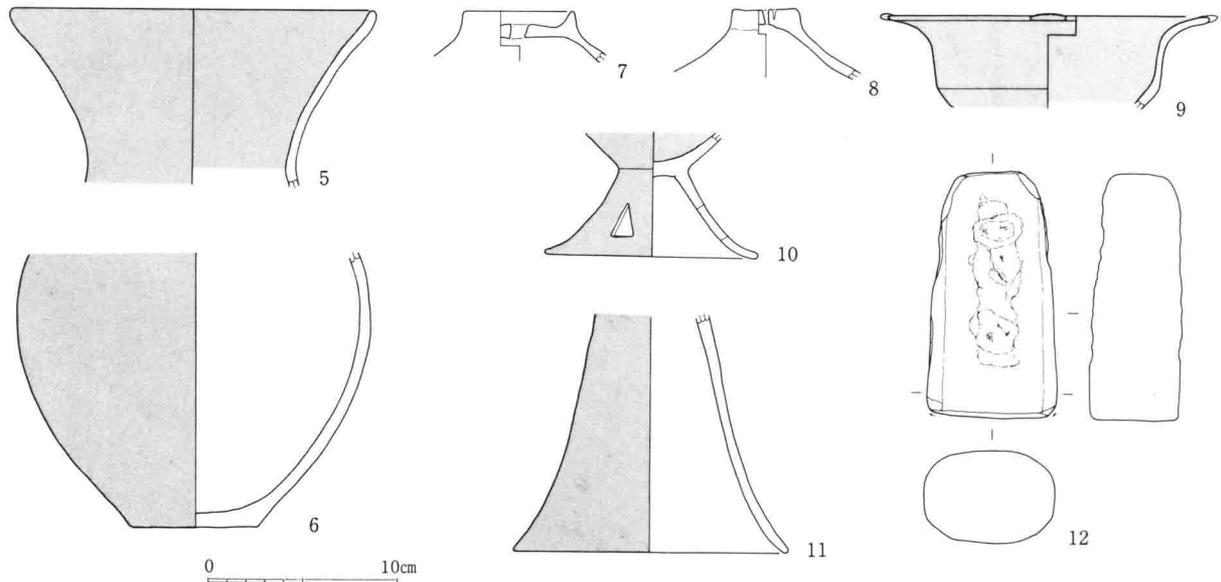
広口壺（6）・蓋（7・8）・
 高杯（9～11）等の器種が
 ある。5の内外面はヘラケ
 ズリ調整が施されるもの
 の無彩であるのに対し、6の
 外面は赤色塗彩される。蓋
 のつまみ部には焼成前に小
 円孔が穿たれる。高杯は坏
 部内外面、脚部外面はヘラ
 ミガキ調整で赤色塗彩が施
 される。10の脚には三角孔
 が3個あけられる。拓影図
 （11図）中、1・2は壺の
 頸部破片で、1には4段に
 接続する連続簾状文がみら
 れ、2には櫛描T字状文が施
 される。3・4は中期の土器
 片で重複関係にある2号住
 居址に属するものであろう。
 敲打台石はもともと中期の
 石器を再利用したもので両
 面に不規則な打痕がある。



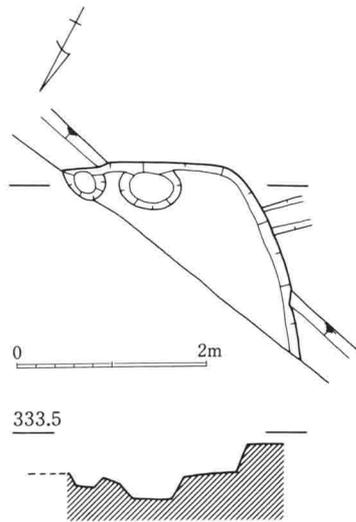
13図 1号住居址実測図（1：80）



Ⅲ-7 1号住居址



14図 1号住居址出土遺物実測図（1：4）



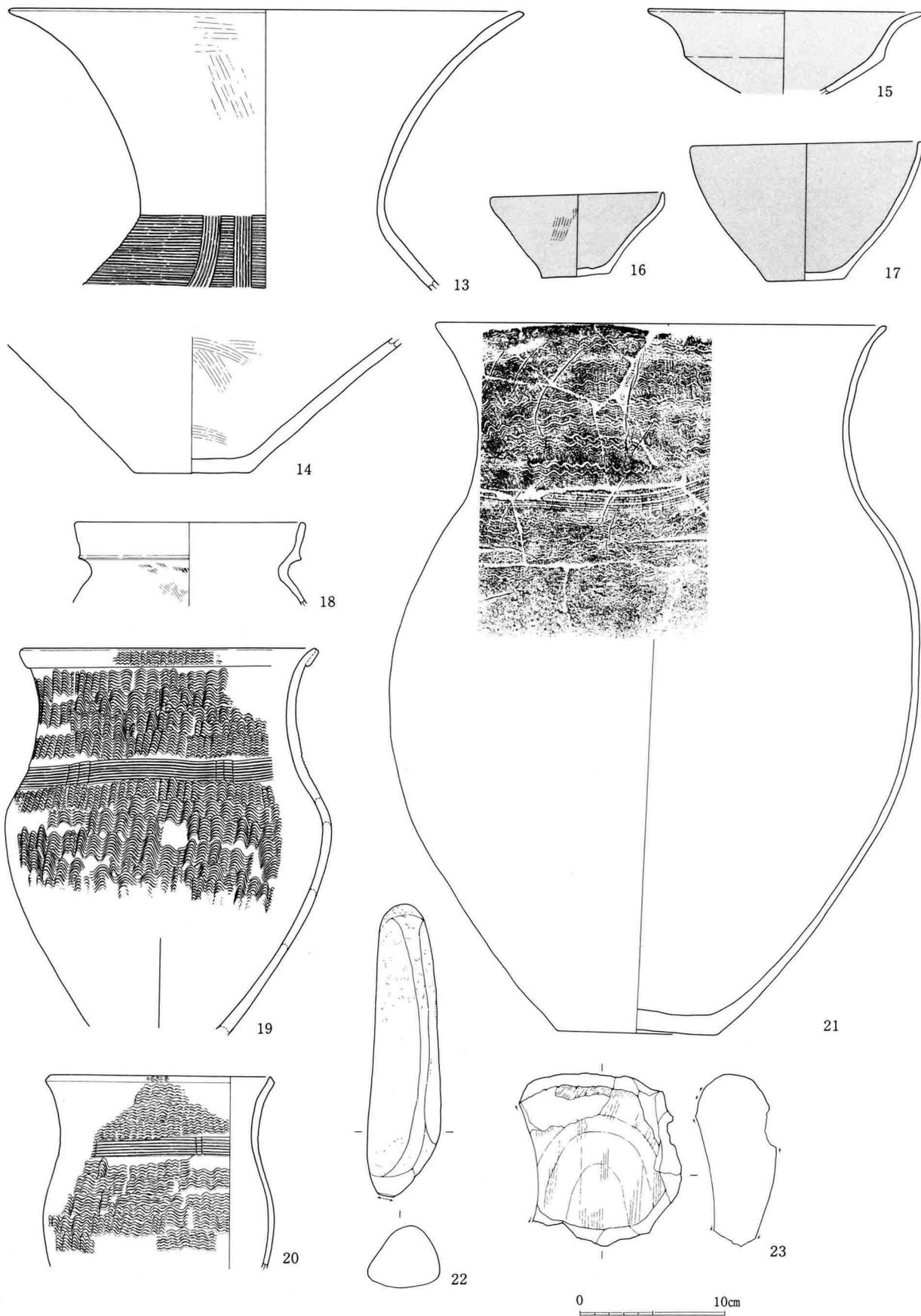
15図 6号住居址実測図（1：80）



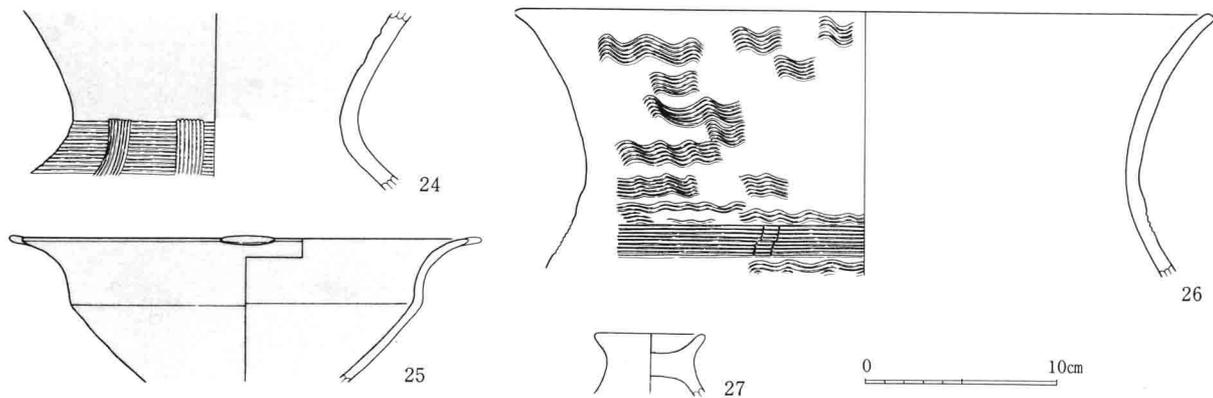
Ⅲ-8 2号住居址

6号住居址(15図) 調査地の南寄りに位置するものの、遺構の大部分は西側の調査区域外にある。調査では南西隅部を露呈したにすぎない。形態は隅丸長方形を呈するものと思われるが、規模および内部施設等は不明である。掘り込みは28cmを測る。

遺物 出土量は多く、その出土状態は投棄した様相がうかがわれた。器種には壺(16図13・14)・高杯(15)・浅鉢(16・17)・甕(18~21)がある。壺の頸部には櫛描T字状文が巡らされているが、赤色塗彩は施されない。高杯・浅鉢は内外面ともヘラミガキ調整で、赤色塗彩される。甕の18は有段口縁で、北陸系の土器の影響を受けているが胎土は在地のものである。調整は口縁部および頸部は強いヨコナデで、体部外面はハケナデが施され、内面はナデによっている。なお、この土器の同一個体が5号土坑から出土しており、同時期に存在した遺構と考えられる。口縁部から体部中位まで波状文と頸部に簾状文を巡らす箱清水式土器特有の甕(19~21)には大中小の3形態がみられる。大の21は器高49.9cm・体部中位の最大径37cmを測る。器形の特徴としては、19の口縁部が粘土帯の貼付による折返し口縁になり、20の口唇部は面取りされ波状文を巡らし、21の器体が大形土器の割には1cm前後と薄いことにある。施文は共に上から下に施されている。体部下半と内面の調整はヘラミガキによる。この他に石製品として硬砂岩河原石利用の敲打石(22)、凝灰岩製の砥石(23)が出土している。



16图 6号住居址出土遺物実測図(1:4)



17図 5号土坑出土土器実測図(1:4)

(2) 土坑

5号土坑(図) 調査地の東寄り中央付近にあり、方形周溝墓の埋葬主体部想定位置にあたる。形態は円形を呈し、直径1.6m・深さ1.1mの規模になる。底面に炭化物の堆積がみられ、貯蔵穴の用途が考えられる。

遺物 覆土からの出土で、器種には壺(17図24)・高杯(25)・甕(26)・蓋(27)がある。この他に6号住居址から出土した有段口縁甕(16図18)と同一個体が出土している。

4 古墳時代前期の遺構と遺物

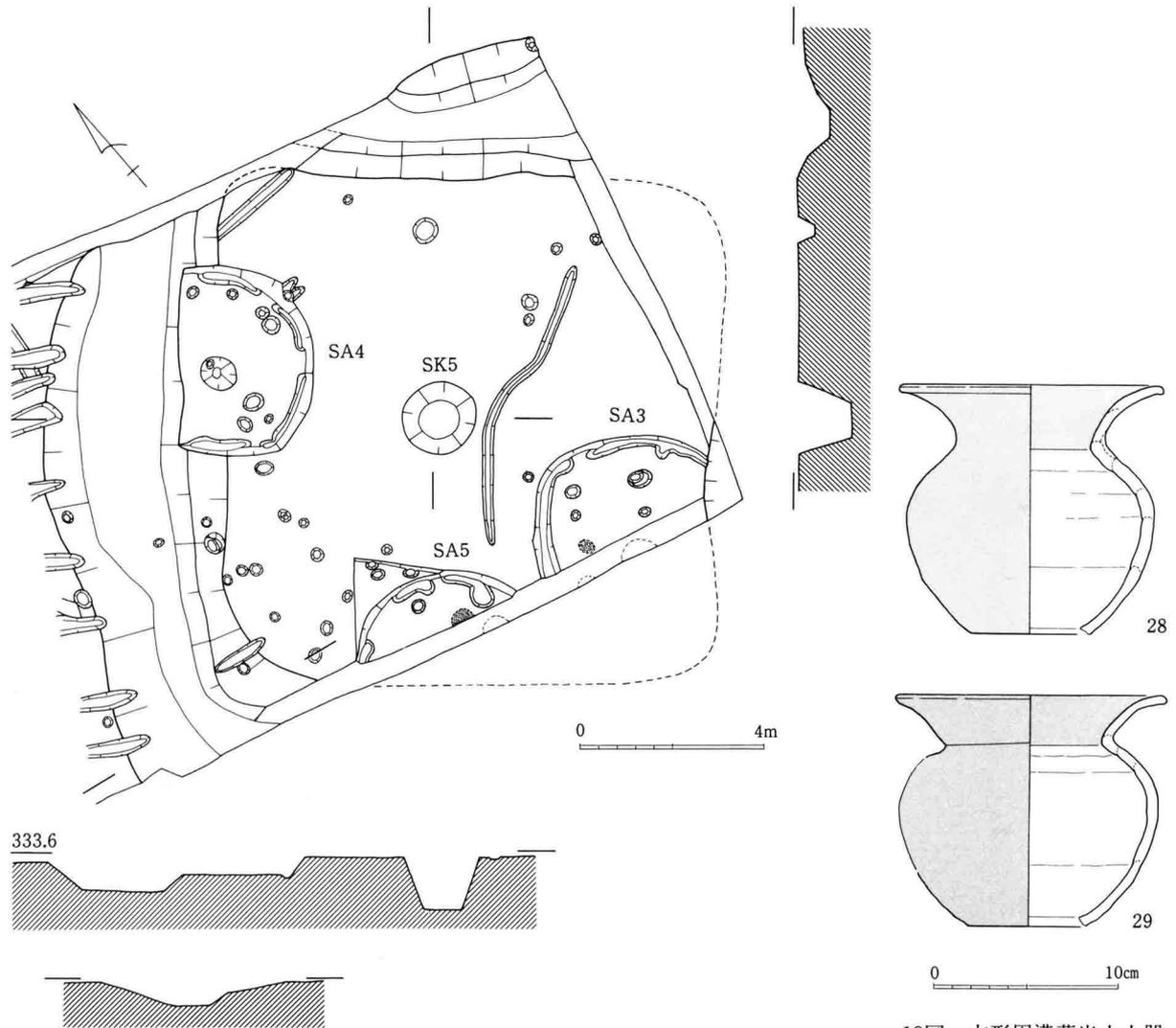
(1) 方形周溝墓(18図)

調査地の東半分を展開する遺構で、溝の底面まで検出できたのは西と北側の一部にすぎない。外周上端規模は不明であるが、内周上端の法量は10.4m前後と推測する。西側の溝幅は内壁が直線的であるのに対し、外壁は曲線的で1.5~2.1mを測り一様ではない。掘り込みはなだらかな勾配を有しており、深さ40cmの浅い溝になる。5号土坑付近に埋葬主体部を予想するが、調査時には削平を受けており確認できなかった。

遺物 西側溝覆土下層から、転落破損したものか破片状態で底部穿孔広口壺(19図28・29)が2個体出土している。口縁部は大きく外反し、体部が球形を呈するものの器高が低いためずんぐりむっくり形態である。28の頸部の接合には補強粘土が貼り付けられるのに対し、製作者の違いであろうか29にはみられない。底部の穿孔は焼成前に行われている。共に外面と口縁部内面の調整はヘラミガキが施され赤色塗彩される。体部内面はヘラナデ・ナデ調整であるが、成形痕を残す。この他に土器製有孔円板片(12図4)が出土しているが混入品であろう。



Ⅲ-9 方形周溝墓



18図 方形周溝墓実測図（1：180）

19図 方形周溝墓出土土器
実測図（1：4）

5 時期不明の遺構

(1) 並列溝状遺構（4図）

交差する溝址も存在するが、東西に並列し両端が集結する溝址に着目して呼称する。規模は北側のものが長く、南にいくに従い縮小する。調査地内では6号溝址が最も長く4.2m、12号溝址が最短で3.1m測る。掘り込みは浅く10～15cm程度である。出土遺物は弥生時代中期の土器の小破片が少量認められるが、後期のものはない。ただし、覆土の状況から方形周溝墓を切り込んでおり、この遺構より新しいとの調査所見を得ている。検出面から数点の古墳時代後期・平安時代の土器片を採集しているので時代比定はできないが後世の所産と考えたい。性格も不明であるが畑作による畝との考えも捨てがたい。

(2) 小穴群（4図）

調査地内に円形の小穴が多数散在するが、配列に規格性がなく小屋組等が想定できない。また、時代を確定するにたる遺物の出土はない。

6 遺物観察表

図 番 号	番 号	種 別	器 種	法 量 (cm)			遺 存	成 形 ・ 調 整 等	備 考
				口径	底径	器高			
2号住居址									
7	1	弥生	壺	6.8			ママ	折り返し口縁, LR縄文・貼付文・平行沈線文	
	2	〃	甕	19.0			1/8	〃, 櫛描羽状文, ヘラミガキ	
3号住居址									
7	3	弥生	甕	22.7			3/4	LR縄文, 櫛描羽状文, ヨコハケ・ヘラミガキ	床
4号住居址									
7	4	弥生	甕	25.8			4/5	LR縄文, 櫛描羽状文, ハケ・ヘラミガキ	床
1号住居址									
14	5	弥生	壺	19.0			1/6	内外ヘラミガキ・赤彩	
	6	〃	〃		6.7		1/4	外ヘラミガキ・赤彩, 内ナデ	
	7	〃	蓋				ママ	つまみ部穿孔, ナデ	
	8	〃	〃				ママ	〃, 〃	
	9	〃	高坏	17.0			1/4	内外ヘラミガキ・赤彩	
	10	〃	〃		11.0		1/4	坏部・脚部外ヘラミガキ・赤彩, 三角孔3個	
	11	〃	〃		14.1		1/3	外ヘラミガキ・赤彩, 内ハケナデ・ナデ	
	12	敲打台石		長12.9・幅6.9			ママ	閃緑岩, 両面敲打, 中期石器の再利用	
6号住居址									
16	13	弥生	壺	36.0			ママ	T字状文, ヘラミガキ	
	14	〃	〃		8.0		ママ	外ヘラミガキ, 内ハケナデ・ナデ	
	15	〃	高坏	19.1			1/3	内外ヘラミガキ・赤彩	
	16	〃	鉢	12.0	4.7	6.8	1/2	〃・〃, 外ハケナデ1次調整	
	17	〃	〃	15.8	5.3	9.6	1/3	〃・〃	
	18	〃	甕	16.1			1/3	有段口縁, ヨコナデ・ハケナデ, 北陸系	SK5同一個体
	19	〃	〃	21.0	8.0	28.3	完	折り返し口縁, 波状文・2連止簾状文, ヘラミガキ	
	20	〃	〃	16.1			1/3	口唇部面取り, 〃・〃, 〃	
	21	〃	〃	30.5	11.3	49.9	完	波状文, 多連止簾状文, ヘラミガキ・ナデ	
	22	敲打石		.長20.3・幅5.1			ママ	硬砂岩, 先端使用, 磨石?	
	23	砥石		長11.7・幅10.1			ママ	凝灰岩, 両面使用	
5号土坑									
17	24	弥生	壺				ママ	口縁部内外ヘラミガキ・赤彩, T字状文4個	
	25	〃	高坏	23.5			1/2	内外ヘラミガキ・赤彩, 突起4個	
	26	〃	甕	36.4			1/2	波状文, 2連止簾状文, 内ハケナデ・ナデ	
	27	〃	蓋				ママ	ヘラミガキ・赤彩	
方形周溝墓									
19	28	土師	壺	14.6	6.5	12.7	完	外・口縁部内ヘラミガキ・赤彩, 内ヨコナデ, 焼成前穿孔	周溝内
	29	〃	〃	14.5	6.6	13.8	完	〃・〃, 〃, 〃	〃

IV ま と め

調査地は300㎡という狭いものであったが、成果は得るところが多い。まず遺跡の範囲の拡張である。中俣遺跡Ⅱ地点が北限に近い遺構と考えられていたが、今回の調査での遺構分布状態から更に北に展開することが判明した。栗林期の住居址も全形を露呈したものはないが、土器に時間差を求められないことから中俣遺跡Ⅰ地点同様に中期後半の一時期に盛行した集落の存在が予想される。また、Ⅰ地点の集落と連携する有力集落の一つとも考えられる。後期の集落の展開はいま一步判然としないが、近接するⅡ地点の検出住居址とを考え合わせれば中期と同様に後期後半に中核集落が形成された可能性が高い。古墳時代前期の居住施設は確認されていないが、Ⅰ地点の13号溝址に投棄された土器群の在り方や今回検出した方形周溝墓の存在から近隣に居住域があるものと推測される。ちなみに13号溝址のほうが方形周溝墓よりも先行する遺構で、時間的に連続して営まれた集落の予想である。遺物では1号住居址と5号土坑から北陸系土器の系譜を引く有段口縁甕の出土していることが注目される。方形周溝墓から出土した壺も明らかに祭祀土器を意識したもので、盛土に供献されていた可能性が高い。それにしても祭祀土器の出土量は少ない。他方向の溝に埋没しているのであろうか。



VI-1 検出遺構全景



3



4



10



13



16



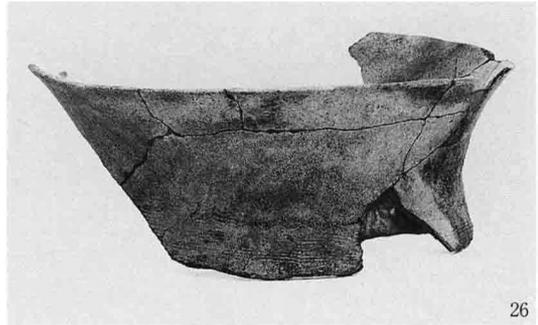
17



19



21



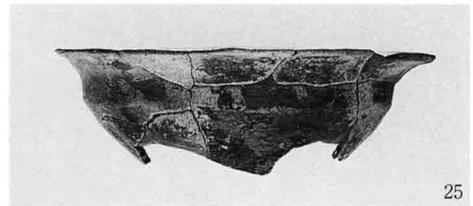
26



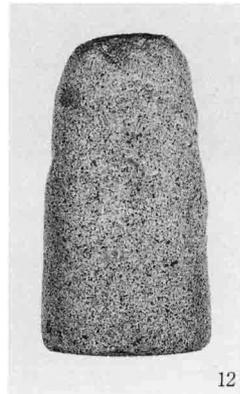
28



29



25



12



5



6

報告書抄録

ふりがな	こまざわじょうあと・なかまたいせきさん						
書名	駒沢城跡・中俣遺跡Ⅲ						
ふりがな	えすえすぶいてんぼけんせつちてん・えいらくかいはつながのしてんじむしょけんせつちてん						
副書名	(株)エス・エス・ブイ店舗（西友古里店）建設地点、(株)永楽開発長野支店事務所建設地点						
シリーズ名	長野市の埋蔵文化財						
シリーズ番号	第76集						
編著者名	矢口忠良・飯島哲也						
編集機関	長野市教育委員会埋蔵文化財センター						
所在地	〒381-2212 長野県長野市小島田町1414番地 TEL 026-284-0004 FAX 026-284-0106						
発行年月日	1996（平成8）年3月31日						
印刷業者	ほおずき書籍株式会社						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		経緯度	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号				
こまざわじょうあと 駒沢城跡	ながのけんながのしかみこまざわ 長野県長野市上駒沢 てらうら 寺浦1033番地 他	20201	A-214	北緯 36° 40' 23" 東経138° 15' 57"	19941226 ～ 19940314	1,400m ²	店舗建設
なかまたいせき 中俣遺跡Ⅲ	ながのけんながのしやなぎはら 長野県長野市柳原 しもそりまち 下返町2551-10番地	20201	B-004	北緯 36° 40' 06" 東経138° 15' 45"	19950911 ～ 19951011	300m ²	事務所建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
駒沢城跡	城館跡	中世	堀跡・柵址・火葬施設・ 土墳墓・土坑	内耳土器・漆器椀	城（館）跡としては疑問 が残る		
		平安時代	竪穴住居址2軒	土師器・黒色土器	沖積地の小規模集落跡		
		古墳時代前期	溝址2条	土師器	祭祀遺構・遺物？		
中俣遺跡Ⅲ	集落跡	弥生時代 中・後期	住居址5軒・土坑	弥生土器	該期の中核的集落の可能 性がある		
		古墳時代前期	方形周溝墓	底部穿孔広口壺	遺跡内で新発見の遺構		

長野市の埋蔵文化財第76集

浅川扇状地遺跡群 駒沢城跡
小島柳原遺跡群 中俣遺跡Ⅲ

平成8年3月29日 印刷

平成8年3月31日 発行

編集 長野市教育委員会
発行 長野市埋蔵文化財センター

印刷 ほおずき書籍株式会社